1592

世界講演叢書

聖なる父

著 ウォルター・スイサン博士
譯 今泉眞幸

聖なる父
活ける基督

基督教青年會同盟本部

特61
161

聖なる父

フオルサイス博士著
谷泉眞幸譯

日本基督教青年會同盟本部

明治
41 3 11
交付

聖なる父

フォルサイス博士著
今泉眞幸譯

聖なる父

（約翰傳第十七章第十一節）

詩篇第百三篇を讀んで、「父がその子を憐むが如く、エホバは己を畏るゝものを憐み給ふ」の句に至るや、吾人はそが今日の人心に適合するものなるを覺ゆ。聖書中には屢、イスラエル魂の眼光が當時の時代精神に超越する所あるを見ることなるが、此の句の如きも正にその一にして、契約の神より一歩を進めて、父なる神に到達したる

ものなり。是れ直觀的悟得を喝破せるものにて、その由て來るや神靈の感動により、その機熟するや、此世に對する神の最先にして又た最後なる關係を顯現するものとなれり。その高き風調、その深き衷情、その熱烈なる本願は、永久に基督に在つて活く、即ち無限の憐憫、無限の約束、無限の能力――情緒纒綿思慮徹底せる憐憫、他を墮落の深淵より引上ぐる約束、倦むことなきの能力、盡くることなきの平和――なる基督に在つて活く。

然れども、此句や全豹の眞理を盡したるものに非ず、尙ほ前途に遼遠の實在あるを示す。父なるものゝ中には、此上もなき憐憫と愛情の外に、尙ほ一層高く深きものあつて存す。彼は聖き父にして又た

救贖者たり。吾人の贖はれて子たることを得る根源は、父格中の聖性に在るなり。此の聖性や吾人が贖はれて子たることを得る障碍となるものに非ず。『オー主よ、爾は我等の聖者にて在ます、かるが故に我等は死せざるなり』。彼は人間の茫弱に對しては憐憫の父なりと雖も、尙ほ一歩を進めて、人間の罪惡に對しては恩寵の父たるなり。否な尙ほ一歩を進むれば、我等の主イエスキリストに對しては聖き喜悅の父たるなり。神に對する新約的名稱及觀念は、單に『我等の父』に非ずして、『我等の主にして救者たるイエスキリストの神及び父』たるなり。基督御自身の祈禱は、『聖き父』にぞある。是れ神に對する基督の中心思想にして、而かも基督は神をその有の儘に知り

給ひしなり。十字架に現れたる新顯現は、『神は愛なり』てふことのみに止まらず、この『神は聖なり』てふことなりき。是れ神の最も神らしき所、基督にまで現はれたる所、基督の中に現はれたる所なりとす。

舊約に於ても、他の諸宗教に於けると同じく、神は屢父として顯はさる。殊に詩の百三篇に於ては、余が茲に指示し能ふよりも、深き意義と優しき情感とを以て顯はさる。而かもそは幾多の不完全を免かる能はず。その一例をいへば、此の父なる名稱は、神より顯現されたるにあらて、寧ろ神に附加されたるなり。『彼は父なり』にあらで、『彼は父の如し』にてあるなり。且つ彼はイスラエルのみの父なり。『己を畏るゝ者』とは、蓋しイスラエルを意味せばなり。而かも

尚ほ大なるものあり。此の名稱は未だ福音化せられざるなり。その父格は未だ聖潔、罪惡、犧牲、救贖等の觀念と密接なる關係を有するに至らず。唯だ荏弱に對する關係たるに過ぎず。父の憐憫は、此句の前後に見ゆる吾人の荏弱に對するものにて、此詩の本旨たる吾人の罪惡と赦罪とに對するものに非ず。神は父なり、神は聖なり、而かも神が吾人を贖ひ給ふは、聖き父としてに非ざるなり。舊約に於ける父格は、犧牲を要求し給はず、又た之を提供し給はず。然れども新約に於ては、聖き父は犧牲を要し且つ之を供し給ふ。聖性は愛、父格、犧牲、救贖の根本にてあるなり。

啻に道德の方面に於てのみならず、又た神學の方面に於ても、倫理的標準は今日吾人の間に益〻重んぜられつゝあり。吾人は此の變化を歡迎して可なり。こは吾人を驅つて一層精神的なる標準に至らしむるものなり。こは神の全き性質とし、神の永遠なる精神とし、神の最上我中心我として、神の聖性〳〵の上に吾人を樹つるものなり。吾人は是迄單に公義てふ觀念に熱中し、之が爲に神を以て世界の大審院長となすに至れり。吾人は又た之に反動したる結果、締なく甘過ぎる愛に向へり。然れども、是等の觀念は吾人を引上げて、一層精神的倫理的なる標準、即ち父の聖性〳〵に至らしむ。此の聖き父が聖き子に對して滿足を感ずるてふことこそ、實に神格の眞髓たり大業

たるなれ。神なる父は聖なる父なり。聖なる父が最も先づ關心する所は、聖潔てふことにあり。救贖者に對する最初の要求は、この聖性を圓滿具足することにあり。聖き父は贖をなし、又た之をなさゝるを得ざるものなり。基督の光によりて讀み來れば、贖罪は一種の新光彩を放つ。吾人はそが悲痛をもて父の聖性〳〵より流れ出て、讃美をもて又た之に流れ歸へるを見る。聖き父として、神は永遠の父なり、人の創造者たると同時に、犧牲の創造者たり。彼はおのが心より劈かるゝ犧牲を提供し給ふ。此の犧牲や第三者が神に供するものに非ず、(何となれば誰れか先づ神に與ふるものぞ)、神がその子に於て自ら供し給ふものなり。此の犧牲や神以外の力に對して與へら

るゝものに非ず、神自身の聖性と聖法とに對して與へらるゝものなり。十字架によりて、神の聖性を抵げて以てその父格を買ひ得べきに非ず。此の高價なる犧牲を提供するが即ち神の聖性なり。贖ふものは愛なり。謂ふ勿れ、『神は愛なり、何ぞ贖ふを要せん』と。新約は云はずや、『神は贖ひ給へり、如何許の愛ぞ』と。救主が顯し給へる聖き神の最上の本願は、實に此の贖はんことを欲する熱情にこそあるなれ。

是等の事ども、否な尚ほ以上の事が、神の最後の名稱たる聖き父の中に含まれ居るなり。今日の教會は、神は愛なりてふ事に於て、大に得る所ありたり。而かも教會は尚ほ大なる事を學ばざるべからず。即ち尚ほ數歩を進めて神は聖なりてふ事に達せざるべからず。此の聖や外に動きては愛となる。而して此の愛や與へんことを欲する熱情に外ならず。諸君は愛の裡面に入りて、聖に達するを得ん。而かも尚ほ奥深く進みて、聖の裡面に入るを得ず。聖は實に燬き盡す所の火にぞある。神子の成肉を眞に信ずるは、神に取りても人に取りても、聖が最終最上最深なるを信ずるに在り。吾人は愛を通じて聖に至り得ん、而かも聖の故をもて愛に至り得るのみ。吾人は凡て神國の來臨に對して熱中す。然れども、之よりも尚ほ先に求むべきものあり。こは他に非ず、神國來臨の一條件たる『爾名を尊崇めさせ給へ』にてあるなり。此の尊崇は基督の死に於て完ふせられ、

之によりて神國は建設せられたり。今日吾人は是の祈の順序を顚倒するの憂あり。『爾國を來らせ給へ』は第一願に非ず。神國は聖性の滿足に由りて來る。神國は聖性の滿足を來すものに非ず。『神は愛なり』とは福音の全體に非ず。愛が聖法と交渉せざる間は、未だ福音的となりたるに非ず。虹の中央に寶位あり。此處に父に咫尺し奉らんと欲する一種の聖別ありと雖も、而かもそは必しも、十字架に現るゝ父格を成立する所の聖性を、十分眞面目に考ふるものに非ず。此の十字架や崇嚴、永遠、不可測にして、此の中に救あると共に審判もあるなり。

吾人は父てふ語に、多大の意義を附し過ぐること、決してあるなし。

此語は基督教的神性の總體にして、又たその骨髓なり。こは此語の自然的意義（人間的の意義）を精神化したるよりも遙に大なり。十字架を以て此語を解釋する鍵となし來れば、こは全く超自然的意義を帶ぶるに至る。此語の意義を淺薄にすることそ、寧ろ吾人が常に陷り易き弊に非ずや。この意義の十分に發揮せられたるは、古往今來唯だ一回あるのみ。こは『父よ、彼等を赦し給へ』てふ、基督の信仰と事業とに顯れたり。『父よ』、是れ基督の信仰なり。『彼等を赦し給へ』、是れ基督の事業なり。神的父格の眞髓は、聖性によれる赦罪にあり。此に至りて始めて福音的なりと謂つべし。これ聖性に對する犧牲に由りて罪惡に處する恩寵の事柄にして、人に對する服役に由りて必要に

應ずる愛の事柄以上に屬す。若し此の眞理を匡正し復活して、以て信仰界の適處に回復せんには、そは吾人の說敎に熱情を與へ、吾人の仁慈に壯嚴を與へ、吾人の行動に活力を與へ、吾人の敬神に道德的剛健を與ふべし。吾人今日の敬神は餘りに軟弱にして、剛健的性情を支配するに足らず。今日の宗敎に最も缺くるものは權威なり。而して此の權威を得るの道は他なし。十字架にあるのみ、十字架の本質にあるのみ、十字架と神の聖なる要求との關係にあるのみ。今や父てふ語の意義を探るに方り、若し之をその自然的意義の水平以下に考ふるも、又た之をその水平だけに考ふるも、共に餘りに淺薄なる意義を、此語に附するものと謂はざるべからず。

若し之を自然的意義の水平以下に考へなば如何。語を更へて言はゞ神を何等の意義に於ても父として考へずば如何。

今日吾人の中、理論上此の誤をなすもの少し。而かも實際上之に陷るもの多し。彼等は口に喋々神の父格を唱ふと雖も、彼等の實際的神觀は、必しも神を父と觀るものに非ず。余の謂ふ實際的神觀とは現實に彼等の宗敎に影響を與へ、彼等の心靈的習慣に色彩を與へ、彼等の思想的調子に型式を與へ、彼等の奥深き心魂に根據を與ふるものをいふ。彼等は神を力と觀、判官と觀、王者と觀、一種の攝理と觀るなり。彼等に取りて神は統治者たるに過ぎず。然れども、我

が心魂の深奥に於て、その不斷の活動に於て、神の子たることを體得するもの多からず。多數の基督教徒は、必しも愛俗家に非らざるべし、而かも彼等が子たることや難し。彼等は僅に、猶太教とペンテコステとの間に立ち、基督を受けながらも未だ聖靈を受けざる弟子の位地にあるなり。彼等は未だ子となりしに非ず、唯だ子となり得る力を受けたるのみ。父格の光十字架を通じて、未だ彼等の上に照り出でず、未だ彼等を九天の高に携へ上らざるなり。滔々たる世間の宗教は、現實なるべく實際的なるべきも、未だ子たるの域に達し居らず。彼等は多少眞面目ならん、活動的ならん、仁惠的ならん或は天主教ならん、或は新教ならん、或は教會的ならん、或は政治

的ならん、或は神祕的ならん。そは神國の來臨に熱中し、且つ神意の一局部に基けるならん。その博愛事業は、上は最も深く最も熱誠なる献身より、下は形式的流行的器械的の慈善に亙るならん。然れども、そが實驗上十分に體得し居らざる所は（教役者自身之を白狀す）、神意及び神國の中心と全局とを觀得することなり、父及びその子イエスキリストと一心同體となることなり。眞に神旨を成さんと欲せば、先づ之に信任せざるべからず。經に曰はずや、『神の旨はその子イエスキリストを信ずるにあり』と。愛すべしとは、基督の命令なり。而かもこは眞に愛することにして、單に愛せし人々によりて鼓吹せられ慫慂せられたる、事業をなすことに非ざるなり。

然れども、幸にして今日の世、此の題目を詳論するの必要あるを見ず。

二

たとひ如何に理想的に考ふるも、若し父てふ語を自然的意義に解せんとするは、決して之に正當なる意義を附する所以に非ず。神が自己を顯現し給ひしは、此の世の父に由れるに非ず。人間界の父格は僅に暗示に過ぎずして、眞の顯現には非ざるなり。眞の顯現はその子と十字架とに由れり。而してそが持來せる音信は、世界に取りて眞に超自然的なるものなり。その意を別言せば、吾人が愛を超へて恩寵に進まざるは、父の意義を淺薄ならしむる所以なり。此の恩寵と

は聖き愛の謂にして、他の憎惡を忍び且つ之を贖ふ所のものなり。眞正の超自然は奇跡に非らず、寧ろ奇跡の奇跡にして、その他幾多の奇跡は之れが爲に存す。こは自然界に於ける不思儀に非ずして、歴史に於ける神の恩寵なり。こは自然の法則に直接の關係を有せず元來奇跡なるものは、宗教的觀念にして、科學的觀念には非す。一の事件の奇跡たる所以は、そが自然の法則に對する關係に由らで恩寵に對する關係に由る。イエスの誕生が何等の方法を取るも、神子の成肉は一奇跡たるを失はず。超自然の行はるゝ區域は、自然界にあらずして歴史にあり。而かも幾多の事件の因果的連續たる歴史にあらず、個人若くは人類の精神的行程たる歴史にあり。是ぞ超自然

の眞の區域なる。そは神意の活動が人意の上に加はる所にありて、自然の法則の上に及ぼす點に存せず。是れ人の罪惡の上に加はる神の恩寵の作用なり。世界の最大奇跡は、神がその子供否なその放蕩兒をも愛し給ふことにあらず。稅吏も亦たしかせざらんや。こは神がその敵をも愛し赦し贖ひ給ふことにあり、神の心がその聖性に對して彼等を贖ひ給ふことにあり、神が彼等が思ひしよりも更に大なる苦痛によりて、彼等が受くべき筈なる凡ての苦痛を潔め給ふことにあり、彼等の根本的罪惡とその審判とによりて、罪惡の中堅を破碎し給ふことにあるなり。自然の法則の有無如何に拘らず、こは奇跡たるを失はず。是れ神の場合に於ける父格なり。是れ聖性がその

生命たり動機たり保證たる父格なり。此の父格は唯一の秘密又た奇跡にして、自然界に取りては、緣なき事、あり得べからざる事、信じ得べからざる事に屬す。凡ての事の中、こは最も異常の事なり。之に衝突あり勝利あり顯現あり、之を鼓吹せる靈の祐助によつて始めて信ぜられ得べし。是れ十字架に現るゝ父格にして、之に此の父格が現す所の恩寵あり、之に此の父格が見出す所の贖罪あるなり。『吾人と聖き父との間には、吾人と此世の父との間になきものあつて存す。他なし、罪惡是なり。罪惡、陰府、咀、怒、是なり。この神の咀と怒とは、罪の上にのみ加はらず、又た心靈の上に加はる。諸君はおのが思ふ儘に心靈上の教理を改造し得べし、而かも心靈の歷

史より若くはその將來より、是等の實在を抹殺し得べからず。文明進歩の馥郁たる香氣も之を蔽ひ得べからず。神の咀と怒が吾人の間に存するは、聖き父が吾人を見棄て給はぬが爲なり、恩寵が天を包圍するが爲なり。此の咀と怒とは聖性の働にして、この聖性の上に愛はその希望を置く。吾人は自然的父格(此の世の父)を、如何に虐待することあるも、之に對して罪を犯すことなく、又た犯す能はざるなり。元來罪なるものは、自然界、自然的關係、自然的愛情には、全く何等の緣なき事柄なり。自然界には聖てふことなし。而して罪をして罪たらしなるものは聖なり。かの放蕩兒が罪を犯したるは、その父に對してには非ざりき。又たその際彼が執れる行動も、罪の癒さる

べき條件の全體には非ざるなり。彼が『天に對し爾の前に罪を犯せり』といへるは正當なり。天に對しては罪を犯したれど、父には唯だその前に犯したるのみ。この無上の價値ある比喩中に、福音の全豹が包含せられ居るに非ず。基督教は救贖の宗教なり。然れども、吾人がこの比喩中に見る所は、救贖にあらずして赦罪なり。若しその比喩にして基督教の全豹を盡したるものならば、基督は必しも福音の要素に非ざるなり。何となれば、此の中には基督を見ざればなり。此處に現るゝ父は、聖き父に非ずして、唯だ恩愛あり忍耐あり智慮ある父、即ち理想化されたる而かも最も自然なる父に過ぎざるなり。彼は神の全體を代表せず、又た神の恩寵すら十分に代表せず。

彼は聖き神に取りてその恩寵が如何に高價なるかを毫も現さず、唯だそが全く價なしに人類に與へらるゝことを示すのみ。又た彼は宇宙の道德的秩序、歴史の運命、人類の將來、永遠の聖法等を一身に負擔する者を代表せず。彼は唯だ個人的悲痛と傷けられたる愛情とを感ずるのみ。そは一個の事柄のみ、而して救贖は然らず。そは兩人間の事柄たるに過ぎず、而して救贖は之と異なり。心靈は世界なくしては救はれず、又た潔めらるゝことなし。心靈を贖はんが爲には、罪の根本は破碎せられざるべからず、世界は改造せられざるべからず。然るに、神が罪の世界墮落せる人類に處し給ふの道は、此の比喩中に現はれ居らざるなり。父はその子の悔改を惹起さんが

爲に、何等の方法をも執ることなし。之に加ふるに、元來此の譬喩の眼目は、長子と彼が取れる態度にあることなきか。一篇の中心點は末段にあるには非ざるか。此の末段こそ主眼の前景にして、前段の美はしき物語は、唯だ之れが後景として存するに非ざるかとは、一個の疑問たるを失はざる也。

忍んで待ち喜んで與ふる、限なき愛として父格を觀るは、是れ餘りに父格を限小するものなり。善業を悔改と見、悔改を贖罪と見、鋭意その告白を遮ぎりて、僅に『復たそれ等の事をいふ勿れ、過ぎ去れる事をして過ぎ去らしめよ、再び之を追究する勿れ』といふに止まる愛は、十全なる父格に非ざるなり。人類に對する父格と赦罪は

その極めて單純なるにも拘らず、單に過去の抹殺、同情ある讓歩、新しき發足のみを意味せざるなり。神は萬事を見そなはし給へばとて、萬事を悉く赦し給ふに非ず。凡てを了解するは、凡てを赦すことに非ず。こは書齋中の倫理にして、倫理學者の倫理、殊に基督教的神學者の倫理に非ざるなり、放蕩兒の父に（此處には愛と耻辱と相面す）現はゝよりも、十字架に於て（此處には聖と罪惡と相面す）更に多くの父格あり。放蕩兒を抱擁し接吻せる父格よりも、十字架に於て基督を遣てたる父格は、吾人の心靈に取りて更に大なり。吾人は啻に情に脆き父の愛心を傷けたるのみに非ず、又た彼の聖き法律を破りたるものなり。人は單に脱走者たるのみに非ず、又た叛逆

者たるなり。憫むべき臆病者に非ずして、大膽不屈なる敵對者なり。道德者たるカントは、人の中に根本惡ありと告白せしに非ずや。カーライルは無限の咀ふべき事ありと喝破せしに非ずや。歐洲にも幾多の活けるメフイストフェリース（惡魔）あり。咀ひに咀はれたるサタンの禍は、人類全體の上に懸れり。淺薄なる個人主義者が、その祈禱中に口籠もる所の『哀れなる罪人』とは、そが公開の祈禱に於て人類の罪惡を代表するものなるを思ふ時は、實に哀れなる告白なりと謂はざるべからず。赦すとは忘るゝことに非ず。こは過去を抹殺することに非ず。世に所謂大赦と復位に非ず。世には一大缺陥ありて、之に由りて一人の罪能く全世界を破碎するに足る。

一個の心靈斯の如くそれ壯大に、その墮落も斯の如くそれ深甚なり。正義の衣服に縫目なきこと斯の如く、人をして人たらしむる所の道德的秩序の遍滿完全なること斯の如し。神の聖性の要求は忽諸に附すべからず、何處にか何人によりてか、滿足を與へらるべきものなり。此の聖性は實に、父格をして尊貴ならしめ、人格をして人格たらしむる所以なり。世には抹殺の儘にて了るべからざる負債あり、人類とその將來に對して唯一の保障たる精神的秩序あり。此の聖律の要求は、輕く退けられ得べく、若くは買收せられ得べきものに非ず。神は過去に對して之を一時停止する能はず。又た萬世に通じて單に之を公布するのみに止まるべからず。こは神の永遠なる性質中

に、その不朽の要求を有す。神若し世を贖ひ給はんとならば、何處にか正當なる審判に於て、此の要求に效力を與へざるべからず。審判によれる神の聖性の實現は、その愛の發露と等しく、普遍永遠なる父格に欠くべからざる要素なり。こは單に救主の上に降れる苦痛のみに非ず、實に聖き審判にてありしなり。之によりて聖き父は、世界の心髓に於てその罪を處分し給へり。聖性の故にのみ刑罰を要求する聖き父として、神は基督に於て罪を審判し給へり。神は此の一點に罪を集中し、斯くておのが聖律の統一に照して、之に最後の處分を加へ給へり。世の罪人が盲目的に不平的に怨みながら受くる所の苦痛と死とは、此處に於てか聖き神の了解と共に了解せられたり。

罪悪は神が之を見給ふ如くに見られたり。審判は神の審判として受けられ、聖さ審判、正しさ審判、父の審判として、世界人類の前に承認せられ負擔せられ尊崇せられたり。罪の最後の悲劇たる刑罰と苦痛の中に、聖性が聖性に對して與へたる最後の證明は、父がその子に於てなせる贖にして、之によりて父の感情が一變したるには非ず、此の審判の爲に彼と世界との關係が永久に一變したるなり。

三

赦すてふ事は、神に於ては人に於けるよりも、容易なると同時に困難なり。神は聖く且つ罪の痛苦を感ずるが故に困難なり。神は聖く且つ道德力を有するが故に容易なり。兎にも角にも、赦すことは人

力以上に屬す。赦罪は犧牲を含む、而して犧牲は、罪に打たれたる人の靈が拂ひ得るよりも、遙に高價なるものなり。罪は聖潔の感を痲痺せしめ、之に對する犧牲力を枯死せしむ。人若しおのが犧牲により若くは悔改によりて、自ら破れる道德的秩序を回復し得るとせば、その秩序は彼に對して再び主權を有する能はざるべし。若し吾人にしておのが良心を癒し得るとせば、その良心は最早吾人の王たる能はざるべし。たとひ吾人はおのが紊亂せる道德的秩序を滿足させ得るとするも、吾人の抑へ難き自滿の念は直に又た之を覆へすべし。ルーテルが言へる如く、『吾人は『天が下に於ける最も高慢なる驢馬(愚物)』たるなり。吾人は後悔し得べく繕縫し得べし、而かも贖ふ

能はず回復し能はざるなり。吾人は相互に贖ふ能はず。たとへば、吾人はいかでおのが損傷を加へたる死者に對して贖ひ得んや。余はカーライルがその妻を失へる後の悔恨を思ふ。吾人の心も吾人の手も、死者の許に達する能はず、彼等にその全生涯に亙れる報償を携へ行く能はず。嫉妬の神は吾人に代りて彼等に贖ふの特權を獨占し給ふ。吾人は彼等よりその赦を受くる能はず、又た吾人の赦を彼等に與ふる能はず。吾人は彼等に祈る能はず、唯だ彼等の爲に祈り得るのみ。吾人は吾人に代りて彼等に贖ふべく、神に祈るの外なきなり。吾人はカーライルの如く、八十歳の壽を保ちて長き悔恨の生涯を送り得べし。さればとて吾人の損傷せる若くは度外視せる死者に

對して贖ふ能はざるなり。又た吾人の許に宿れる天使——そが飛び去りたる後に始めてその天使たるを悟りたる——天使の羽衣一枚の亂だも正す能はざるなり。世には又た心破れたる人にして、喜んで自己に罪を犯せる者を赦し居るものもあらん。而かも彼に罪を犯せる者は、その心の破れを癒す能はず、又た贖ふ能はざるなり。否な吾人はおのが心に加へたる損害すら贖ふ能はざるなり。實に吾人はおのが心靈に對して罪を犯す、而して之を贖ふ能はず。然らば則ち吾人に傷けられ度外視せられ罪に刺されたる神に對して、吾人はいかでおのが罪を贖ひ得べけんや。たとひ吾人の神學は之を許すとも吾人の良心は之を許はざるなり。過去は抹殺すべからず、變更すべ

からず、綱縫すべからず。過去の事實は、日月の如くに嚴存す。唯だ之を贖ひ得べきのみ。而して之をなすは吾人の力に非ざるなり。若し悔改にして贖をなし得んには、そは悔改をして最も價値あらしむる所の、謙遜なるものを失ふべし。悔改を來すものは贖罪にして贖罪を來すものは悔改に非ざるなり。何人もおのが兄弟の心靈を救ふ能はず、否なおのが心靈をすら救ふ能はず。基督が自身之をなし得ることを目覺し、且つ之を公言し給ひしは、取も直さずおのが人間以上なることを自覺し給ひしによる。人の負債は人之を贖ふ能はず、神も亦た之を抹殺し給ふ能はず。放蕩兒の負債は、何人も之を拂ふ能はず、唯だその父のみ之を能くす。蓋し此の負債は、服從聖

潔の負債にして、苦痛刑罰の負債に非ざるなり。刑罰は犯罪（國法上）を贖ふのみにて、罪惡（宗教上）を贖ふものに非ず。此の負債は聖性に對するものにして、單に之を公義に對するものとなすは誤れり。◎公義は刑罰を要求し、◎聖性は刑罰の中に聖潔を要求す。此の聖性は、多くの他の心靈に對する刑罰の中に、一の心靈の完全なる聖潔を要求す、愛なき憤怒の中に愛に富める服從を要求す。神のみおのが破りしことなき聖律を吾人の爲に成就し給ひ、おのが借りしことなき負債を吾人の爲に拂ひ給ふ。

斯くて神は十分に吾人の負債を拂ひ給ひたれば、赦罪に於ける神の恩寵は吾人に取りて溢るゝ許りにて、その結果人をして、この恩寵

は神の身に取りて何等の犧牲をも要せず、唯だその愛心より流れ出づるものゝ如くに思はしむ。その實神は之れが爲に十分高價なる犧牲を負擔し給ひたればこそ、恩寵の美觀を害ひ愛の香氣を薄ふするが如く見へざるなれ。仁惠の德は無理に搾り出さるゝものに非ざるなり。

借問す、かの輕快と敏活と巧妙とを以て製作する所の美術家は、如何にしてか此に至りしぞ。蓋し長年月の實習と苦鬪と克己と服從とにより、快樂の一生といはんよりも寧ろ勞苦の一生と評すべき一生涯によりたるに非ずや。然れども、名工の技術は、是等犧牲の痕跡を表面に現さず。神が諸君の前に供する恩寵は、その犧牲の露骨な

る表現に由りて、その美を害せざるなり。

今や諸君が友人をおのが家に迎へ入れ、歡待優遇至らざるなきに方り、諸君は彼をして、庖厨に於ける奔走、諸種の設備に關する苦心、談笑の中に蔽ひ居る疲勞、愛嬌の中に抑へつゝある心痛等を知らしめんと欲するか。神はおのが恩寵の價を吾人に見せつくることによりて、その恩寵の美を傷け給はざるなり。福音主義の失敗と腐敗の一部は、基督及び使徒等が口を噤して多く語らざりし、救贖の由々しさを輕々しく吹聽することに因す。宗教談の常套題目たる罪に關してすら、基督は赦罪に關係するの外は語り給はざりき。沈默は否定に非ず。放蕩兒の喩譬も他の譬喩と同じく、福音全體を代表

するものにあらで、殊に一點を明にするを旨とす。一點とは何ぞや。神の恩寵が無代價にて與へらるゝこと――恩寵の美、父格の花――即ち是なり。此の譬喩は、恩寵が何等の犧牲をも要せざりしこと、人間が供し得る以上の滿足が要求せらざりしこと、贖罪はラビ的構造談なることを敎ゆるものに非ず。ラビ的なるが故に構造談なりとの理由何くにか在る。ラビ敎を輕蔑するは自由思想の弊なり。神若し基督當時のラビ的思想の中に働き居らずとせば、吾人は何等の理由によりてか、神は佛敎の中に働けり、神は現代思想の中に働きつゝありと言ひ得るか。然れども、此の譬喩が吾人に敎ゆる所は、恩寵も愛と同じく無代價に與へらるゝこと、恩寵若し何等の犧牲をも

要せざりしならば、斯くも豐富に流れ出づる能はざること、救贖の偉大なる力が神秘にして而かも優美なることに在り。恩寵若し何等の犧牲をも要せざりしならば、斯くも豐富に流れ出づる能はざることに就ては、吾人は尙ほ幾多の理由を有す。貴重なる自由にして無代價なるはあらじ。血なく犧牲なくば、恩赦なく、免除なく、自己の發見なく、心靈の回復なく、安心立命なく、心靈上の美と力と自由なきなり。十字架なくば、寶冠あるなし。是れ神にも人にも同樣なる眞理なり。恩寵は犧牲を意味す、而かも十二分の犧牲なり、喜んで供せられたる犧牲なり。神の恩寵を不十分なりと思ふ勿れ。父の恩寵の豐富なること、吾人の思惟を絕す。恩寵の混々として流れ

出づるは、その淵源に深きものあつて存するに由る。技術は技術を蔽ふ。赦罪の術と之に現はるゝ恩寵の美は、贖罪の術と之に含まるゝ悲痛と勞苦と秘密とを蔽へるなり。

四

神の示現は、その大なる力の條件として、その深き淵源を有す。此の淵源や必しも進入禁制の地に非ずと雖も、又た吾人の眼前に展開さるゝにも非ず。基督及び新約聖書は、恩寵の代價、『救の方法』、『贖罪の理』、即ち基督が神の前に吾人の咀を負ひ、之に由りて世界の罪を除き給へる、正確なる方法と意義とに關して、吾人に失望を與ふる迄に沈默の態度を取る。然れども、之に關する眞理は（聖靈

と敎會の存する以上は）、吾人の知るべきもの又た知り得べきものなり。既に救はれたる良心は、その道德界の爲に之を知らんことを希ふ。こは敎會の信仰に取り、最後には各個人の信仰に取りて、極めて必要なる眞理たるなり。若し諸君にして恩寵の價を少しも知ることなからんか、こは恩寵をして全く無效ならしむる危險を犯すものなり。その極吾人の救を殆ふするに至らん。吾人をして再び放蕩兒の譬喩——恩寵の無代價にて與へらるゝことを永久に表象する所の——に歸らしめよ。若し赦されたる季子が、歲月の進み行くにつれ、おのが受けたる恩惠を眞面目に思案して、神と父とにおのが加へたる損傷の如何に大なりしかを感ぜずば如何。若し彼にして、

己を迎へ己を饗せる恩赦の裡面に窺ひ入るの意なくば如何。若し彼にして、おのが行衛を思ひ、おのが復歸を希望し、おのが姿を遠くより認識せる、父の眼底に深く透徹するを欲せずば如何。若し彼にして、父の位地におのが身を置て見る程、父の歡迎によりて動かされずば如何。若し彼にして、輕薄なる心を以て是等の事實を觀、恩赦によりておのが感ずる所は唯だ喜悅のみなりと、世間に公言せば如何。又たおのが知る所おのが知らんと欲する所は、唯だ之のみなりと言はば如何。若し神の容易に與へ給へる赦罪が、彼をして容易く自己を赦しおのが過去を忘れしめば如何。若し寛大にして忍耐なる父が、聖き父となることなくば如何。若し彼にして、主の祭壇の

燈火を執て罪の恐るべき穴に入り、父の恩寵の妙なる奇跡を探究することを、不必要なりと感ぜば如何。若し以上の如くならんには、諸君は果して彼を何とか思ふ。

若し必要あらば、彼に許すに一二年の間驚喜の幻夢中にあることを以てせよ。若し必要あらば、彼の心靈に與ふるに聖き密月旅行を以てせよ。然れども、歳月の進み行くにつれて、天使も尚ほ知らん欲して而かも知る能はざる、救贖の秘義を探るの熱情なく、救贖者に取りて救贖が如何に深き意義を有するかを窺ふの誠意なく、贖はれたる結果として、良心が深刻となり行く形跡なく、豚を養へる時に省悟せしよりも、一層深き意味にて我に立返へれる徴證なく、淺薄

なる宗教的情感と輕浮なる宗教的思想とを以て滿足し、父の靈の高潔なる標準を以ておのが罪惡を計らず、おのが蹂躙せし愛の如何に崇高森嚴なるかを悟らず、主の必死的難戰苦鬪に關して知る所なく、永遠の救贖てふ衡器にて世の罪惡を量ることなく、恩寵を蒙むれる彼の生涯にして、若し以上の如くに過ぎずとせは、諸君は果して彼を何とか思ふ。彼は果して再び父に失望を與へつゝあるにあらざるか、果して異なれる方向に――今回は宗教的に――恩寵より墮落しつゝあるにあらざるか。吾人はしか疑はざるを得ず、而かもその疑ひの理由なきに非ざるを思ふ。彼れ或は、淺薄なる樂天主義、美しき父格觀、趣味ある敬神、社會的禮儀、道德的同情、審美的興味

悔改と思誤れる慈善心、救はれたるにあらで悟りたる良心等の修養道を取るやも知れず。或は神秘的敬虔派の道を取ることもあらん。若し後者に出でんか、無教育者の場合には、能辯なる宗教家より進んで軟弱なる聖徒に墮落するの恐あり。斯くて柔和なる風采を裝ひ一小團體を以て天國と思做し、今日の無一物なる宗教を以て無上の寶と心得、大地の如き深厚なく、天路歷程なく、聖血の沸騰なく、活ける人生に觸るゝことなく、烈しき戰鬪に與かることなく、神に對する力なく、心靈の自主と識見と度量となく、我にも人にも心靈の實在とその救贖者とを信ずる信仰を强ゆる實力なし。たとひ個人としては、斯かる宗教的感情主義の危險より救はれ得んも、斯くの

如くに行動する教會は、遂に免れ能はざるべし。

五

放蕩兒の譬喩は一片の物語によりて、神の恩寵の價なしに與へらるゝことを示し、基督はおのが心靈によりて、吾人の中に永遠なる活ける恩寵として、之を示し給へり。基督はこの譬喩中におのが全我を發揮し給ひしか。之によりておのが思惟する所、經驗する所、成就する所、罪惡恩寵榮光の深さ高さに關して感得する所を、悉く披瀝し給ひしか。若し基督にして大福音ならんには、いかで一片の譬喩中におのが全我を含め給ひ得べき。否な、凡ての譬喩凡ての教訓を合するも、こは不可能の事たるなり。凡百の教訓無效に歸し、幾

多の譬喩失敗に了りし後に、晩餐てふ最後の大譬喩、ゲツセマネの最後の大祈禱、十字架及び墓に於ける最後の大奇跡は來れり。此に至りて後も尙ほ、基督はその心中に、父格の供する犧牲に關して、放蕩兒の譬喩中に含めるよりも以上のことを有し給はざりしか。否な。より以上の世界は茲に在りき。ペテロは數年の後、主なる聖靈の敎によりて、基督の寶血の高價なることを語れり。而してこは他の使徒等の思想中にも、繰返して高調せらる所たるなり。げに彼等は、基督の敎訓が基督の死によりて照さるゝのみならず、又たその光輝中に殆んど埋沒せらるゝを見たり。基督の福音としては、十字架は敎訓よりも遙に價値多し。此の十字架は、神の正義を發揮し、

又た吾人の爲に一の功業を成就す。此の源より吾人の功業は悉く出で來るなり。福音書中、受難に關する記事の割合に多量なるだけを見ても、基督の弟子等に取りて、基督が敎師たるよりも寧ろ救贖者なりしこと、聖靈が彼の敎理より來らずして彼の十字架より來りしことが知らるゝなり。

而かも基督自身が、父格の供する聖き犧牲に關し、おのが苦痛と死の神に及ぼす效果に關して、殆んど言ひ給ふ所なきは眞なり。終に至る迄おのが最も多く關心し給へることを、基督は最も少く洩し給へり。その事たるや、基督に對する人間の要求に非ず、又た人間に對する基督の行動にも非ず。こは基督に對する神の要求なり、即ち

基督の苦痛に對する神の要求、基督の服從を要する神の聖旨、神の聖性に及ぼす十字架の效果なり。基督の意中にては、十字架の第一の效果は人間の上にあらざりき。若し然らずば、彼はこの事に關して尙ほ多く言ひ給ふ所ありしならん。且つその一生の終に方りて、こは基督の最も深く心に懸け給ふ所となれり。而かも基督は吾人の神學思想を滿足せしめんが爲に、之に關して語り給ふ所甚だ少く、否な殆んどなかりしなり。十字架と贖罪の性質は祈禱なること、基督がその全生全靈を注ぎ給へる事業は、その眞髓に於て祈禱なること、即ち人に對する行動にあらで、神に對する交渉なることを示す、一二言なきに非ず。吾人は透明堅固沈靜なる斯人の苦痛より搾り出

されし數言を有す――是とても彼の一生の態度と矛盾するに非ず。而かも此の數言、僅に傍人の耳に入りし此の數言は、人に聞かれんが爲に、吾人の如き辛ふじて救はるゝ者の爲に、發せられたるに非ず。此の沈默や、基督の行爲と苦痛が吾人々類に及ぼす結果以上に、子が父に對して客觀的に交渉しつゝありとしてのみ、始めて了解し得らるべき沈默なり。この沈默は、使徒等の書簡に比するに（是等も大體に於て沈默的なれども）稍その趣を異にす。之れが爲に今日の自由思想をして、福音書と書翰との間に正當の傳統あるを疑はしめ、福音書の基督を書簡の基督より、基督を保羅より、基督の宗教を新約的ラビ思想より救出さんと努力せしむるに至れり。

余は一方に於て左の暗示を諸君の前に呈すべし。他なし、弟子等は基督の死に關する基督の言を充分に了解せざりしが爲め、悉く之を其心に銘記せざりしならんといふ事是なり。余は此暗示中に何等の意味なしとは言はず。福音書は固と完成せる基督の傳記に非ず、基督の眞理の完全なる教科書に非ず。是等はその起原上元來補足的のものなりき。之を唯一完全のものと見做すは、畢竟非歷史的なりと謂はざるを得ず。是等は既に福音を納入れ、既に書簡を有する人々の爲に、彼等の基督に關する智識を滿さんとて、著されたるものなり。是等は救に必要なる知識を傳へんが爲めよりは、寧ろ之を豐富ならしめんが爲めのものなりき。何となれば、使徒等は漸に去りて、

復たその繼續者を殘さゞればなり。之に加ふるに吾人は、是等の小傳記に於ける內容の不釣合を思ふ時に、基督の恩寵的行爲を要すること固より多しと雖も、又た基督教的生活に於てその優しき教訓を要すること屢なるを忘るべからず。福音書の重心は、その短縮せられたる末尾にあるなり。然れども、斯かる暗示の敎ゆる所、豈に眞理の全豹ならんや。余は之と異れる說明一二條を次に提出せんと欲す。

六

若し神にして、人を救さんが爲に來りながら、之に要するものが犧牲を喋々して、之に伴ふものが喜悅豐富自由を示し給ふことなくば、

そは神の恩寵たるに相應しからず、恩寵はそが恩寵たるの實を失ふに至らん。世には憫むべき人物あり。彼は他の過失を赦しながら、そが自己に取りて容易の事に非ざるを洩らす。彼は他を赦すに方りて、餘り多くものが事のみを思ひ、他がものれの寬大なるを忘れんことを憂ふ。彼は常に他を赦すの高價なることを吹聽す。是れ何たる見苦しき事なるぞ。斯かる劣等なる精神は、如何に赦罪の美を傷くるものぞ。斯かる鄙吝なる心事は、如何にそが裝へる寬大の德を滅却するものぞ。如何に父らしからぬ事ぞ。如何に神らしからぬ事ぞ。斯かる方法を以て他の過失に處するは、醜を以て醜に報ゆと謂ふべき也。

斯の如きは、神が取り給ふ赦罪の方法に非ざるなり。神の父格は偉大なり。啻に偉大なるのみならず、又た濃なる情感を具ふ。彼は赦罪の價幾何なるかを、十分に悟るべく吾人に放任し給ふ、被赦者の鋭敏なる心をもて、徐々に悟るべく放任し給ふ。基督は弟子等の親炙數年の後、彼等の心中に思ひ浮ぶ迄は、之におのがメシヤたることを告げ給はざりき。彼は實際メシヤの職能を彼等の上に執行するの結果、彼等が自然に之を悟る迄は、彼等に告ぐるに實を以てし給はざりき。顯現は發見の樣にて彼等に來る。そは經驗の中より湧き出づ。神がおのれを顯現し給ふや壓迫的に非ず。恰も吾人が之を發見したるかの如く、之を吾人の中に注ぎ給ふ。これ神の取り給ふ美

はしき方法にして、吾人が自ら獲たるが如くに與へ給ふ。吾人は神の光を忘るゝこともあらん。斯くて赦罪の事實と共に、此の光は吾人の上に輝き始むなり。赦罪の恩寵の豐富なるや、その價を悟るの力をも吾人に與ふ。新生命の極致は、單に之を享有するのみならで、又たその價値をも認知するの力なり。此の力は被赦者の上に注ぎ込まる。こは經驗より來る眞理なり。此の赦罪は自然にその眞價を發揮す。赦罪の第一條件は、贖罪に關する妥當なる知識に非ず、その代價を相當に感知することに非ず。こは救に必要なる信仰には非ざるなり。之に關する適當の思想は、既に救はれたる者にのみ生ず。十字架は宗教として始まり、而して後に始めて神學となる。赦罪の

條件は、その恩寵と自由とを受くるに、それと等しき自由謙遜喜悅の心を以てするにあり。こはその恩寵を享受するにありて、その義捐を領知するに非ず。こは神が吾人におのれを托し給ふ大御心に吾人を托し奉るにあり。こは神の言葉のまゝを信ずるにあり、その活ける言葉たる基督、剴切にして沈默、仁慈にして剛健なる言葉を信ずるにある也。

基督の事業の犧牲的方面を考察し、父の恩寵の隱れたる富と、基督の十字架に於ける父格の要求とを闡明し、父格が父に對し子に對して幾何の價を要せしかを高調するは、新生命と新眼光と新標準とによりて潔められたる被贖者殊に使徒等に屬す。又た彼等の眞正なる

繼續者たる凡ての忠實なる信徒に屬す。是等も尙ほ基督の敎訓たるを失はざるなり。地上の基督は基督の全體に非ず、カルビンは曰へり、此處に十全の基督あり、而かも基督の中にあるもの悉くあるに非ずと。基督の靈に於て保羅を敎へ給ひしは、肉に於て他の弟子等を敎へ給ひしに異ならず。想ふに、基督は保羅を以て、他の弟子等よりも敎へ易き弟子――一層感じ易き心、一層適當なる精神、或る點に於ては一層信任し得べき眞理の傳達者と思召し給ひたるならん。基督の事業が產出せる是等の初代聖徒は、その謙遜にして感恩の念深き經驗によりて、その事業の眞義に透徹するの明を有せしものなるが、彼等は的確に、おのれを產出して今あらしむるものは、

主の教訓よりも寧ろその十字架なることを告白す。十字架を註釋し説明するは彼等の業なり。學説の解釋としてにあらで、十字架より出づる彼等の生命と精神との解釋として、神學を構成することは、彼等の双肩に委任せられたるなり。

是れ當然の事に非ずや。救贖的恩寵の高價にして貴重なることを高調するは、贖はれたる者のなすべき事にして、贖ひし者のなすべき事に非ず。後者若し之をなさば、頗る見苦しきことならん。彼は吾人に恩寵を持來れり。而かも恩賜として之を持來れるにて、義捐として之を持來れるに非ず。彼は豊熟完成せしものとして、美と愛と力の充足せるものとして、吾人の前に之を提供し給へり。價を拂ひ

し者がその價を吹聽し、價を拂ひながらもその貴さを喋々するは、是れ恩寵の恩寵たる特色を滅却し、その豊富と妙力と不思議とを傷ふ所以なり。之に反して、若し使徒聖徒にして猛進一番、おのが心靈を勵まし自由にし再造せる恩寵の裡面に立入り、吾人の崇拜の目的としてその價——赦罪の爲に聖き父格が義捐せし所、その寛大なるが爲に喋々吹聽せざる所——を發揮して、赦されたる者の良心を刺激し、その驚異の念を引越す迄に至らずば、是れ又た見苦しき事なりと謂つべし。之をなすは、基督の謙遜深沈と相容れざるべしと雖も、而かも之を爲さゞるは、赦されたるものゝ眞の謙遜と感恩の念とに矛盾するを免れざる也。

七

以上の考察は、吾人をして第二の考察に移らしむ。大事業をなす人は、たとひ之を傳承せんが爲に招かるゝものを敎ゆることあるも、自ら之に關して喋々するものに非ず。基督の來り給ひしは、或る事を言はんが爲に非ずして、或る事を行さんが爲なりき。基督の顯現は、敎訓よりも寧ろ行爲にありき。基督の事業は、單に吾人をして明白に神の心情態度を知らしめんが爲に非ざりき。そは赦罪を宣言することに非ず、勿論赦罪を說明することに非ず、否な赦罪を與ふることにすら非ざりき。そは赦罪を成就することにありき、神と人との間に赦罪の關係を立つるにありき。たとひ一方に於て、調和の

態度既に存し、延て調和の行動に至ることあるも、双方に何等かの變動を來さゞる間は、心靈と心靈との間に新關係を成立する能はざるなり。基督の事業の大部分は、海中の氷塊の如く、吾人の目に隱るゝなり。そは基督の神に對する交渉にして、人に對する交渉に非ざるが故なり。基督は神に對して大事業を成就し給へり。吾人が之を知ると知らざるとは、全く別事に屬す。世界に於て爲されたる最大事業は（救贖事業）、世界の外にて（人に關係なく）なされたり。吾人の爲になされたる最大事業は、吾人の背後にてなされたり。唯だ顧みてその背後を見るのみは、吾人の爲すべき事に屬す。吾人の爲に先づ此の事をなすは、吾人に對して何事をかなす第一條件にてある也。

古來の大事業家は、その事業に關して喋々せず。彼等に言葉なきにあらず、意義なきに非ず、唯だ沈默せるのみ。英雄は自己を吹聽する喇叭たらず、救贖者は自己を紹介する使徒たらざるなり。基督は重に父の事を語り給へり、父の子たる自己の事を語り給へり、而かも自己の成就する事業に關し、殊にその事業に必要なる苦痛と價とに關しては、殆んど語り給はざりしなり。

吾人は福音を聞くこと益多きにつれて、その沈默に打たるゝこと愈大なり。世には一種の宗教的熱情、傳道的性急、敬虔的突飛に陷り一日も早く多くの心靈を獲得せんと欲するものあり。彼等は活動餘りに烈しきが爲に、却て吾人に深き印象を與ふる能はず。彼等は忠

實なるよりも寧ろ元氣、分別的なるよりも寧ろ熱情的、靈的なるよりも寧ろ活動的にして、何事をも直に言語か行爲に發表せずんば止まず。而して皎々たる月光が數層の暗雲と等しく、森嚴なる星辰を隱し、壯美なる夜の天を蔽ふものなるを知らざるなり。基督に於て吾人は、斯かる事の痕跡だも見ることなし。基督は世界を急速に傳道化せんが爲に、制度典禮を遺し給はざりき。彼は忍んで神を待ち得る如くに、忍んで人をも待ち得たりき。教會の忍耐的勢力は、その前進的運動と等しく信仰的なり。時としては前者却て後者より必要なることあり。信仰には神聖なる無頓着あり、克己的放任ありて固と神の攝理の無限と、基督の功績の完全とに基くものなり。

基督は神を顯現して、之を解說し給はず。彼は神の證者にして、その辯護家にあらず。彼は神に對して行動し、又た神の爲に行動し給へり。彼は辯論家よりも寧ろ預言者、預言者よりも寧ろ一種の力なりき。彼は說明すること少なく、顯現すること多かりき。而してその顯現も、言說に於けるよりは行爲に於て、經綸に於けるよりは人格に於て、多く顯はれたり。彼は活ける眞理よりも、寧ろ活ける聖靈を與へ給へり。基督にありて、神は自己を與へ給ひたれど、自己を說明し給はざりき。基督は自身神の顯現にして、その顯現を分析解剖するものに非ず。基督を見るは父を見ることにして、如何にして父が父たり得るかを見ることに非ざるなり。吾人は救贖の恩惠に

與かれり。吾人はこの救贖者を愛し、且つ之を信任す。若し彼にして之に關して言ふ所多からば、吾人は却て彼を信任すること少からん。吾人の信仰は、基督の死に對する信任に非ずして、死せる基督に對する信任なり。そはおのが言語を以て赦罪を說明し、吾人の耳に斷へずおのが功業を吹聽する基督を信ずるにあらで、おのが行爲を以て救罪を成就せる基督を信ずるにあり。赦贖者の事業を闡明し言說するは、救贖者自身に相應しからず。彼れ既に赦贖の事業を成就し、その事業は永遠に効果を有す。こは神の中に新しき愛情を起すものにあらで、神人間に新しき關係を建つるものなり。こは人に與ふるに神に對する新關係を以てし、神に與ふるに人に對する新關

係（人に對する新感情に非ず）を以てす。こは神をして父たらしむるものに非ず、父をして罪人を子と見做すことを可能ならしむるものなり。

然れども、此の大轉機は至上者の秘幕中に進行せり。而して福音書の沈默は救贖者自身の沈默を反照す。此の沈默は平靜眞摯堅固深沈なる人の沈默なり。然り、こは此世ならぬ者の靜寂、最聖者の沈着ケルビムの默視、白き大寶位の無言、天上界に於ける聖き戰爭の無聲、現世以外の微妙莊嚴なる精神的運動の靜肅なり。第一の創造（天地人類の創造）の靜寂は、何人も之を見しものなく聞きしものなし。而して此の靜寂は第二の創造（人類の救贖）に於て再び繰返されぬ。こは運行す

る諸天の靜寂、昇る旭日の靜寂、敎會の信仰と愛の曙光中に現るゝ復活の靜寂、聖靈の偉大なる活動の靜寂、否な余が斯く語りつゝある際に、諸君の心中に證をなす聖靈の働の靜寂なり。諸君にして若し眞に父に依り賴む意ならば、此世に寄寓せる時日を過ごすに、敬畏と恐怖とを以てせよ。そは此の聖き父格は、その中心燃き盡す所の火なればなり。

八

余は多少の躊躇を以て、尙一の考察を加へんと欲す。想ふに、福音書中に現るゝ基督の沈默は、彼が苦痛の杯を滿たせる孤獨沈默の一部分なり。彼はおのが苦痛に關して共に語るべき友を有し給はざ

りき。何人も之を了解する能はざりき。彼の弟子中には一の保羅なかりき。彼得約翰の徒は未だ之に達せざりき。否な、最後には父御自身すら彼に對してその顏を背け給ひければ、彼の信仰と祈禱は依然として尙ほ渝ることなきも、父子の交通は爰に一たび斷絕せり。今や歎聲若くば簡單なる獨語の聞ゆるあるのみ。基督はおのが苦痛及び吾人の苦痛を盛れる杯を飲み盡すべき大任を帶び給へり。彼の孤獨沈默は、その貴重なる苦痛、その受難的事業の一部分にしてその事業の成就に必要なる一條件なりき。彼の無言の服從は、彼がその受くる審判の神聖なることを、十分に事實を以て是認し給ふに必然欠くべからざるものなりき。こは彼が父の正義を是認し給へる

完全從順なる讃美の一部にして、人間的災厄の極に彼の信仰と愛より發したるものなり。此の孤獨的無言の中には、彼が心に喜びて『天地の主なる父よ、我れ爾に謝す』と言ひ給ひし時よりも、尙多くの讃美あるなり。こは人類の罪惡の言ひ難き重荷の下に、聖性が聖性を承認せしに外ならず。父の顏隱蔽せられ、將來の洞察隱蔽せられ、おのが榮光と知識の隱蔽が神に對し人に對して必要なることの明白なる意義すら多少隱蔽せられたる中に、單身神の聖判を負はざるべからざりしは、實にこの聖判に必要なる一部分にてありき。然り、基督の知識の不完全なりしは、父の趣旨のみを知りてその方法を知らざる苦痛の中に沈默なりしは、その事業の完全なる榮光の一

要素なりしならん。彼の自己を虚ふし給ひしは、他事に於ける如く知識に於ても、自己制限のありたるを意味す。カルビンが基督の遍在に適用せる語を、余は先に基督の意識に適用せり。曰く、此處に十全の基督あり、而かも基督の中にあるもの悉くあるに非ずと。この完全なる知識の放棄は、彼の大事業に伴ふ苦痛の要素にして、此の事業は、彼の神學より出でしに非ず、彼の道德的人格の無限なる從順と信任とより來れり。想ふに、彼の沈默は、自ら好んで取れる無知、神聖全能なる承諾に由れる無知より來り、彼の自己を虚ふせる極致、自己を卑ふせる絶頂、彼の成肉に必要なる自己制限の十分なる發現、救贖に必要なる事業に於けるその全能なる意志の消極

的發動なりしならん。こは又た、積極的信仰によりて知識的欲望に制限を加へ、信仰によりて多少の神學的無知を甘んじ、自ら許しておのが道德的從順が人類の救贖に必要なる所以を明白に知らざりしことを意味するならん。彼の確知し給ひし事は、唯だおのが從順の救贖に必要なることと、聖き父がその聖性の爲にその王國の爲にその子等の爲に之を要求し給ふことに止まれり。若し彼にして萬事を知悉し給ひたらんには、その苦痛は極めて少小なりしことならん。當時に於ておのが苦痛の意義と妙力と効果とを詳細に知り給ひたらんには、この苦痛は救贖に由りてのみ來るべき榮光の中に消されたるならん。要するに、知識の木は生命の木に非ざるなり。

されば、此の沈默は苦痛の杯を飲み乾す所以にてありき。凡を知れば、何をも苦しまぬことゝなり、苦痛を口に漏らせば、その幾分を免かることゝなる。單獨死に就くは死中の死なり。沈默は苦痛の絶頂極致にして、死よりも一層悲慘なり。而して福音書中に於ける沈默は、救贖者の眞の死、その十分なる苦痛、その絶對的孤獨、暗黑中に於けるその完全なる信任從順を反照す。基督の生涯の短きはその偉大なる所以の一部なるが如く、福音書の沈默は、そが比較的完全なることの一條件なり。そは救贖者の反映としてその完全なることを示す。兩者の沈默は共に、崇高森嚴なる沈默、即ち父の顏と將來の成行の隱蔽を反照す。この沈默こそ、救贖に必要なる最高條

件にして、聖き從順、死に至る迄の信任の最後の試金石なりしなれ。こは父の怒に非ずして、父の聖き愛なりき。而して此の愛は、言語や面貌に表現すべからず、唯だ事實により復活によりて發揮せらるべきものなりき。基督の愛が唯だ最後に死の行動と秘義によりて、沈默的に發現し得たるが如く、神も唯だ死より彼を甦らしゝ不思儀なる行動によりて、沈默的に之に答へ給ふの外なかりき。而してこは基督をその死に際して慰め給ふよりも遙に大なり。何となればこは最も寂寥なる死、最も慰籍なき死、死中の死、死の最も鋭き刺その最も強き力より、彼を甦らせしものなればなり。沈默は沈默に對して呼び、甦らしゝ意志は、死せし意志に對して答ふ。その

答や沈默の對唱にして、今後永遠に心靈界の不變なる秩序不動なる平衡とはなれり。

斯く論じ來れば、おのが恩寵の價と父格の苦痛とに關して喋々するは、我が救贖の主將に取りて相應しからざりしなり。之に關して多く語るは、救はれたるものゝ當になすべき事なりき。且つ敎會は常に、父の恩寵を享有するのみならず、又たその貴重なる價値を認識すべき筈なり。吾人はこの測り知るを得ざる秘義に對して、多少感得し理會する所なかるべからず。吾人は救主の恩寵と、聖律に對して嚴肅なる愛とを崇拜し得んが爲に、聖性に照して罪の重量を計らざるべからず。敎會が聖靈を離れ福音書の敎訓より退却せしは、此

の努力の爲にはあらざるなり。敎會は時として岐路に迷ひ入ることもあらん。而かもゲーテが言へる如く、敎會はその磁石を正すべく常に十字架の許に復歸せざるべからず。敎會は十字架の印象主義（感化的贖罪說）を以て、永く滿足し得べきに非ず。十字架は單に宗敎的功德の爲にのみ存せず。敎會がその道德的態度を取るも此に在り。敎會がその倫理的標準を見出すも此に在り。敎會が神の道德界とその權威とを發見するも此に在り。敎會が人の良心を改造するも此よりし、社會を再建するも此よりす。是等は十字架の顯現とその實相より來るものにして單にその恩寵と功德より來るものに非ざるなり。斯く肝要なる斯く不變なる悟得に於て、二千年來の敎會は果して誤

謬に陷りたるか。若し然らんには、教會の中には聖靈なかりしなり。然らずんば、教會の中に働ける聖靈は、基督の事業とその眞相及實力とに關して、誤謬を傳へたるものと謂はざるを得ず。

九

以上論じ來れる所によれば、或は神は特別の犧牲を供せずして我等罪人の父たり得べしといひ、或は神の聖性〳〵我等の悔改以上に要求する所なしといひ、或は神その聖性〳〵を放棄し給ふとも、その愛は尙ほ信賴し得べしといひ、或は神おのが本性の要求を拋たんと思召さば、直におのが心の愛情を示し給ひ得べしといふは、神の父格に附するに、餘りに淺薄なる意義を以てするものと謂はざるべからず。』

又た、基督の犧牲は、神の恩寵の結果に非ずして、その原因なりと考ふるも、前說と等しく、神の父格に淺薄なる意義を附するの譏を免かれ得ざるべし。

又た、赦罪の爲に神が提供し給へる犧牲の高價なるを思ふの餘り、そが神の最大恩寵なること、そが吾人に取りて無代價なること、その富その力その美その忍耐その寬大その自由を忘るゝに至らば、是れ亦た神の父格に淺薄なる意義を附することゝなるなり。

人の子にして誰れか、神の全體と基督の圓滿とを表するこの聖き父格に、十分の意義を附し得るものあらんや。父格は神格の眞髓にして、又たその總體なり、且つ人類救贖の由て出づる泉源なり。その

森嚴なる愛は、救主の流血淋漓たる苦痛の内容にして、そは人が人に對して有する至情の聖化なり。吾人の全靈が渴仰する全神に對して、之よりも適當なる名稱はあらじ。父格は自然的にして、同時に又た超自然的なり。人間主義に是程人間的なるはなく、基督に此の『聖き父』程超人間的なるものなし。こは汚物濁水を呑吐し洗滌する海水の如くに世界を包圍し、下は幽界の魑魅魍魎を浸し、上は天界無限の笑を反映す。こは又た『人界の津々浦々に打寄せて、祭司の如く潔の禮を執行する活ける水』の如し。

吾人は此の名稱を一層單純ならしむる能はず、又たその意義を十分に究め盡す能はず。こは最も深き名、最も懷かしき名なり。男にも

女にも小兒にも響く名なり。最も優しく最も嚴しく最も廣く最も崇き名なり。こは人性中最も人らしき部分に押印して、人性中最も神らしき部分となす。家庭、國家、人類、教會、神國、能動、被動、良心の生活、人倫の諸關係及びその義務、道德心とその愛、正義、憂慮、仁惠、靖献、壯美、災厄、喜悅、是れ豈に吾人の中に神の印象を帶べる部分に非ずや。是迄の懷かしき諸名稱は、その新しき意義に改鑄せられて、更に神らしきものとなり、吾人の必要に適切なるものとなれり。是等の諸名稱は、最も神的なると同時に最も人的なり。父、母、妻、子、戀人、乙女、是れ古き古き話にして、而かも世人が少しも倦まざる所なり。人情曲折の話、犧牲献身の話、

吾人之を聞て倦むことなし。戀人同志が初め菓園の籬に沿ふて私語し、次に初生兒の死を歎き、或は愛情冷へて永久他人となり、或は同棲して白髮に至り、終に共に靑山の麓に眠る——斯かる事件の吾人に對する興味は、人界數千年の思煩と罪惡よりも永續す。吾人の虛僞、罪惡、騷擾、榮華、失敗が煙散霧消せし後も、斯かる人情は依然として渝らざるなり。豈に啻に之にのみ止まらんや。是等の人情は永遠神の中にあつて活き、基督と共に神の中に隱れ居るなり。永遠は心情を破滅せず。吾人の偉大なる感情は、贖はんことを欲せる父の感情の祭壇下に蓄へらる。此處には、曲れるもの悉く直くせらるゝ如く、感情の千襞萬皺も凡て延ばさるゝなり。基督の聖き

父を信ずる吾人に取りて、愛は世の厭世家が唱ふる如きもの、自然が種屬保存の爲に個人を愚弄するものに非ざるなり。愛は永遠なるものに屬す。吾人の短き生涯は、肉情を變じて愛情となし、愛情を變じて道德とす。人生は感情を靈化し聖化するものなり。斯生既に之をなすを得、永遠のなす所果してそれ幾何ぞや。生既に之を顯現す、死何ぞ之を顯現せざるの理あらんや。人生既に聖化するの力あり、況んや聖なる神に於ておや。是等の不朽なる愛と情緣の中に流るゝものは、實に神自身の生命なり。人情は父を吾人に與へず、聖き父人情を吾人に與へ給ふ。人情の斷へざる歌は、神靈の反響に外ならず、是れ神都を廻れる莊嚴不斷なる聖河に渦く水聲なり。而し

て此の水聲の總合調和は、即ち宇宙の大音樂にぞある。吾人の最初の愛、最後の愛、少時の夢、老年の悲、悉くアルフハにしてオメガ、永遠の父、聖き救贖者の中に永遠化せらる。此處に又た、人類を妻とし、世界を牧區とし、何の因緣もなく恩を知らざるものゝ爲に生命を捐つる、聖徒の精神あつて存す。聖き父。是れ手を以て造られざる家の家神、正義と愛心の行はるゝ國に於ける國王、社會的福音を有する社會神、おのが一身に永遠の家庭と社會を具ふる三位神なり。愛、損失、父の情、母の情、子の情、妻の情、寡婦の情、家庭、國家、又た以上のものを犧牲とする英雄魂、悉く是れ天に於て永久なるものなり。是等の情は、一度その子を失ひしことある永

遠の父、一度その父に棄てられしことある永遠の子、此の二者の心中にありて永久持續せらる。此の聖き愛は、神經過敏なる現代の病弊を救治するに、吾人が最も必要とする所ならずや。

古往今來、今日程人の慈悲と愛情とが重んぜられたることなし。然れども、今日も明日も、そが無限にして根本的なる神の愛を代表する程に、深甚崇高となることなかるべし。聖き永遠の父の恩寵は、人類の間に唯一の肖像を有するのみ。即ちイエス、十字架に磔けられたるイエスの聖顏ぞ是なる。十字架の原因は、人が失はれたるが爲のみに非ず、神が愛なるが爲のみに非ず、蓋し又た父が聖なるが爲なるなり。聖は愛の歸趣にして、神の父格の無盡藏にして、吾人

の愛の永存する所以は、全く神が聖なるによる。聖は愛を保障して永遠に不變ならしむ。聖の圮づるゝことなくば、愛は圮づれじ。聖の廢るゝことなくば、愛は廢れじ。基督の死を要求せる聖性は、そが一たび滿足せられしことによりて、永久不變なる愛の唯一の保障となれり。神若しおのが聖性を輕視し給はんには、吾人はいかで彼が又たその愛を輕視し給はざるを必せんや。然れども、おのが子を惜み給はざりし神は、いかで之に添へて萬物を吾人に與へ給はざらんや。今日よりも人情主義の行はれたる時代はあらじ。然れども、吾人が單に十字架を感ずるのみならで、尙ほその意義を讀破し來る時は、父格の眞髓は道義的愛情にありて、こは啻に他を慰め他を助け他の爲に泣くのみならず、又た自ら贖ふによりて他を赦すことを知る。今日吾人は、恩寵の眞髓たる此の道義的仁愛と、贖罪の淵源たる此の聖なる慈悲の深意を、新に學びつゝあるなり。十字架は、此世の嚴肅なる事實、幾多の悲酸、痛苦、悲劇、犧牲等を、莊重謹嚴なる態度を以て沈思默想することよりも、更に大なり。十字架は歷史に持來すに永遠の救贖を以てせり。吾人は今日程、父の心事を解せしことなく、又た放蕩兒の父を信ずるに容易なりしことなし。而かも又た吾人は今日程、救主の父を解し得る希望を抱きたることあらざるなり。

吾人の頑是なき荏弱を顧みる父格は、吾人がいみじくも解し得る所

なり。此の父格を發揮して楚々人を動かすこと、バトモア氏の詩に及ぶものあらんや。彼れ一夜おのが幼兒を罰し、後ち之をその寢室に臥さしめぬ。忍耐深きその母は、既に死してあらざりき。彼れ心の痛苦に堪へず、幼兒を見んとてその室に行きけるに、幼兒は既に熟睡に入りて、その傍には些細なる幾多の玩具横はれり。是れおのれを慰めんとて、彼がその小さき衣袋より取り出せるものなりき。

かくてその夜半、我れ神に祈れり、
我は泣きけり、我は斯くぞ言へり、
いつか我が息、とこしなへに絶へて、
復た御こゝろを、傷め得ざらん時、

餘念もあらで、笛大皷もてあそぶ、
我がをさなきを、もしみそなはさば、
ながいましめを、深くも悟り得ぬ、
我がつたなきを、もし知ろしめさば、
我は土にて、つくれる父なれど、
なんちは更に、大なる父なれば、
怒をさめて、斯くぞ言ひ給はん、
『我はあはれむ、彼の頑是なきを。』

これ豈に美はしく而かも沈痛なる事ならずや。こは人類の茫弱に對する神の憐憫を代表するに、餘りに鋭敏に過ぎ優柔に過ぐることな

し。こは吾人の心を溶かすのみならず、又た極めて神聖なるものなり。

而かも尚一層深く尚一層優しきものあり。即ち放蕩兒に對し反逆者に對する神の恩寵是なり。曰はく『我れ爾の犯罪を拭ひ去らん、我れ再び爾の罪と不義を念はざるべし』と。こは實に吾人をして低頭せしめ、吾人を携へて聖所に至らしむるものなり。

然れども、神は尚ほ一歩を進めて、吾人を最聖所に導き給ふ。世界の中、最も深奥、最も優美、最も嚴肅、最も光榮、最も靜寂、最も永遠なるものは、罪惡を集中せる十字架の上にて從順なりし、聖き子に對する聖き父の喜悅なりとす。此の喜悅は、父が自己の聖性を

愛し給ふ喜悅にして、父の有し給ふ自愛の唯一の形式たるなり。』

こは思想を超越し、詩歌を超越し、聖書を超越し、言語を超越す。神自ら此の偉大なる喜悅を言語に發し給はす、唯だ行爲によりてのみ之を發揮し給へり、即ち聖き靈によりて基督を甦へらしゝことによりて之を發揮し給へり。父は子の偉大なる行爲に答ふるに、更に偉大なる行爲を以てし給へり。沈默は沈默に答へたり。吾人も同じく聖靈の能力と沈默に於て、之を感じ之を崇拜し得るのみ。願くば、聖靈常に吾人を離れず、その無限なる平和と能力の中に吾人は保持して、吾人をして堅固に聰明に仁慈に剛健ならしめ給はんことを。

活ける基督

懼るゝ勿れ、我は首先なり末後なり、我は活ける者なり。前に死にし事あり、視よ、我は世々窮なく生きん、我は陰府と死との鑰を持てり。

約翰然示錄第一章第十七八節

是れ一團の矛盾なり、相互を排斥せず、却て相互を包容し、否な相互を必要とする矛盾なり。

神は人を包容し且つ之を必要となし給ふ。無限の力は無限の荏弱を要し且つ之を包容す。吾人の荏弱に應ぜんが爲に、神は自己より下り給はず、唯だ自己の中に下り給ふ。

又た神は、世界及人生に於ける諸力中、最も目に見へざる、而かも最も現實なる力なり。神無し――無神論は、諸信條の中、最も理あるが如くにして、而かも最も信じ得られざる信條なり。

斯くて又た基督は、諸の存在者の中、最も人に躓を與へ易く人に解せられ難きものにして、而かも最も人に附纏ひ人の離去る能はざるものなり。單なる研究者に對しては、如何に茫漠として捕捉し難きものぞ。而かも信仰者に對しては、現在にも永遠にも、如何に親近に如何に不變に如何に有力なるものぞ。基督の十字架は、歴史上の最大不合理にして、而かも歴史の中心たり關鍵たるなり。

基督教は矛盾の一團塊にして、又た調和の一組織なり。常識の眼より見れば、こは笑ふべきの至りと見ゆるならん、而かも常識程、宗教に危險なるはあらじ。

吾人の信仰は、基督を信ずる信仰なり。此の基督や、在りて在らざる者、活ける神にして死せる人、死せしことある活ける神、卑ふせられて上げられしもの、最も荏弱なる所に、天地最大の力を體得し實現せしものなり。

此の基督を信ずる信仰とは何ぞや。

第一、歴史上の基督を信ずる事、

第二、活ける基督を信ずる事、

第三、各人に個人的關係を有する基督を信ずる事、

即ち是なり。

一　歴史上の基督

爰にイエスと呼べる人ありき。彼の傳記は架空的構造談には非ず。たとひその一伍一什は文字通りに眞ならずとするも、彼は一個の實在者なりき。彼の人物は、歴史上現實にして且つ捕捉し得べきものなり。過去の大人物中に、一種の特色を示し多大の能力を發揮せる人物にして、某の時に生れ、某の地に住み、某の目的、某の教訓、某の行動、某の生活、某の死狀を示せしものなり。

之に加ふるに、此の人は後世に波動を傳へたり。彼は歴史の中に大

なる感化を及ぼせり。諸君は此の感化を抗拒し得べけんも、之を否定し能はざる也。

然れども、眞面目なる良心は、過去に於ける此の感化を否定し若くは痛歎するものに非ず。基督を痛歎するものは、道德に容喙するの權を放棄せるなり。たとひ彼は救贖者に非ずとも、正しく大恩人たるなり。彼はプレトー、アリストートル、ダンテ、シエークスピア、ニウトン、その他文化史上の英雄たる何人よりも、多くの注意と感謝とを受くべきものなり。彼は人類の爲に、その人類たるが爲に、多大の貢献をなせり。彼を信ずる者は、その力の時間的制限に超越するを信ず。たとひ諸君は彼の勢力の無窮を疑ふことあるも、某の

年代間に彼が與へたる恩化を否定する能はざるなり。

若し基督教なく基督なかりせば、吾人は今日、文明の恩澤の多くを享有する能はざりしならん。彼は舊文明の破滅中より新文明を再建せり。しかのみならず、彼は舊文明の精華を保存せり。基督教的歐洲は、希臘羅馬の長所を悉く吸收し、且つ彼等の精髄を不朽ならしめたり。たとひ彼の文明が他の文明に代らるゝことありとするも、以上の事實は依然として事實たるを失はざるなり。舊世界と新世界とを眞に聯絡せしものは基督教なり。現代の諸國民と彼等の諸功業を可能ならしめしものは基督教なり。

仁愛的事業とその進歩に於ては、殊に然りとす。世には、殊に現代

の歐洲、新聞紙上の歐洲には、失望すべきこと多し。然れども、此の歐洲に於てすら、若し數百年前に基督教の弘布なかりしならんには、又た爾後斯教がその根本原理として活動せざりしならんには、その狀態果して如何なりしかを思へ。基督教は戰爭を停止する力なく、又た屢戰爭と迫害とを惹起せり。吾人もその事實なるを認む。然れども、こは政治的思想方略が斯教の中に侵入して、之を腐蝕せしが爲なりき。今や潮勢は一變せり。政治は改悔の途に上りつゝあり。近頃二三基督教國に行はるゝマキアベリー主義は、基督的良心に不快の念を興へ、多數人士をして、斯教若し國家を支配せずは、國家は斯教を滅すに至らん、との感を抱かしめぬ。此の事は、既に

教會政治の中に見へ來りしが、今や國家政治の中にも漸次に現はれつゝあるなり。戰爭に關して言へば、之を停止し得る望だにあるもの、基督教を外にして、他に何等の力かある。民政主義と自利主義とは、之を爲すものに非ず、否な之をなす傾向だも有するものに非ず。民政は王政よりも、盲目的感情に驅られ易きものなり。近頃世界の二大民政國（英國米國）の間に戰爭を防止せしものは、畢竟基督教の講壇と、新聞その他に顯るゝ基督教主義なりしことは、吾人の銘記すべき事ならずや。

歐洲には、基督教國には、新聞紙上に否な宗教新聞にすら代表せられざる分子あり。新聞は之に對して盲目なるに非ず、唯だ之を代表

するに臆病なるのみ。是れ信仰の歐洲、靈の文明、眞實の敎會、精神の基督敎國に外ならず。過去と全く趣を異にし、將來に眞正の希望を與ふるものは、此の歐洲なり此の米國なり。こはその心情その行爲その信仰その希望その公私の生活に於て、最も直截に基督の感化を承認する歐米なり。

古往今來何人も斯かる感化を及ぼせしことなし。そを諸君が喜ぶと否とは全く別事に屬す。而して此の感化は、人の性情に反對の方向を取れる者より來れり。基督は深き人間の至情に助勢し給へりと雖も、人間の僻見と趣味とに對しては、猛然反抗の態度を取り給へり。故フリーマン敎授は曰く、諸君は問ふ、君も尙ほ信者なるかと。然

り、余は信者なり、萬物は神より出づてふ意義以上に、基督敎が神より出でしを信ずるものなり。人は此事を知らずしては、歷史を研究する能はず。神聖羅馬帝國が存在せりてふ事實——羅馬帝國が基督敎的意義に於て神聖となれりてふ事實にて足れり。余は回敎を以て基督敎に比するに、基督敎が羅馬の宗敎たると同意義に於て、回敎はアラビヤの宗敎なり、アラビヤ文明の影響を受けし諸國の宗敎なり。然れども、請ふ兩者の差を認識せよ。回敎は最も見易き原因によりて成功せり、第七世紀のアラビヤ人が有せる凡ての長所短所に訴へて成功せり。之に反して基督敎は、第四世紀の羅馬人が具へたる凡ての美點弱點に對して挑戰せり。而かも基督敎は勝利を得た

り。余は尋常一様の原因を以て、之れが成功を説明する能はず。余が曾て講演の一に於て言へりし如く、カイゼルが磔死せる一猶太人を崇拜するに至りしは、岩石裂け死者甦へれる奇跡よりも、更に大なる奇跡にてあるなりと、

是れ如何なる人格ぞや。諸君は單に歴史家がナポレオンを研究するが如くに之を研究するも、そは尚ほ無比の人格たるを失はざるなり。人類に與へられたる恩澤として、災禍腐敗誤謬の解毒劑として、基督より流れ出でたる凡てのものを考へ見よ。公平無私注意周到なる評價を以て、今日基督の記念と感化より直接に流れ出づる祝福を量り見よ。既に量り出だされたる部分のみにても、しかく大ならんには、此の不思議なる心靈の中に潜在する所、それ果して如何に大なるぞや。

以上余が述べ來りし所は、單なる歴史上の事實として、死せる信仰尋常人士の平民的信仰、單に歴史的知識的なる信仰によりても、承認し得らるべし。歴史上の一勢力としての基督は、今や山上の城にして、再び此の位地より下ることあるべからず。是だけの事は、歴史の新研究が成就せし所なりとす。

然れども、是れ殆んど信仰に非ざるなり、活ける信仰に非ざるなり、基督の死が喚起すべき反響に非ざるなり、此の淺薄なる信仰をすら可能ならしめし信仰に非ざるなり、基督の感化を永久ならしめ、基

督の力をして一般人心に深く透徹せしめし信仰に非ざるなり。

單に歴史上の人物として基督を研究するものゝ上にも、一種の勢力の彼より照り出づることあり。彼等始には歴史家たり批評家たりしが終には同情者賛成者熱心家となるなり。彼等は香料を基督に塗らんとて來りしが、立留りて彼を崇拜し、歸りて彼を宣傳す。彼等は彼の證人たらんが爲め、觸られ捕はれ誓はさるゝなり。彼等は最早ソクラテス、ナポレオンに對する如く、基督に對して冷靜なる能はず。尋常人士は、單に彼を議論し得べし。懸賞に應ずる演説家は、彼に關して大演説を試み得べし。然れども、苟も人情を有し心靈を有する人は、基督に對して冷靜の態度を取る能はず。吾人の同情は

全く彼の爲に占領せらる。吾人は彼を路傍人視せんと欲するも得べからず。歴史上の基督は、血あり涙ある人々の心に信仰を攪起し反響を喚起す。之れが爲に彼等をして冷淡なる批評をなす能はざらしむ。批評家は、おのが心靈の批評家（基督）か、冷靜に吾人を審判せず常に吾人に愛顧を加へて、唯だ吾人の免れんことを望み給ふを見て恐懼の至に堪へざりなり。『主は我等の審判者なり……彼れ我等を救ひ給はん』吾人は乾燥なる光を以て彼を見、冷淡なる血を以て彼を論ずる能はず。此處に活ける信仰の前驅來る。此の異常なる人格は吾人の心に働きて、驚嘆、畏敬、愛情、殊に信仰信任を醒起す。彼は常に吾人の身邊に附纏ひて、凡て吾人が計畫し實行することの觀

察者となり標準となる。彼の美、威嚴、品位、不撓は吾人を貫通し彼の愛、仁慈、忠信は吾人を支配し、彼の豐富なる恩寵は、死に勝ちて再び吾人の中に甦る。彼は想像上の理想となり、進んで道德的命令者となる。而して彼の神子主義は、新宗敎の基礎となるなり。』然れども、此の主義や基督の自我と離すべきものに非ず。彼は之を歷史の中に紹介し給ひ、又たゝのが心靈に之を抱きて、歷史の流を下り給ふ。基督この主義を載せ行き給ふ。この主義が基督を載せ行くに非ず。基督は一たび之を放ちて、その行末を棄て置き給ふことなし。此の主義の在る所には基督在ます。基督の在ます所には此の主義在り。基督によりて、此の主義は通貨の如くに、忠信なる人々

の中に流行す。然れども、多數の人士は此の兩者を分離しつゝあるなり。彼等は基督御自身に反應するよりも、寧ろ彼の主義に反應するの立場にあり。彼等は彼の實在を思はで寧ろ彼の遺產を思ふ。彼等に取りては、基督敎は基督と同一物に非ざるなり。基督は美なり崇高なり賢明なり奇妙なり偉大なり。彼は不思儀にも彼等を感化し給ふ、彼等自らが認識し告白するよりも多く感化し給ふ。彼は敎師なり、模範なり、否な彼の主義の化身なり。然れども、彼は未だ此の主義の永遠なる護衛者保障者に非ざるなり、未だ神の化身に非ざるなり。彼等は未だ『我が主よ、我が神よ』と言はざるなり。彼等の信仰は、死せる信仰に非ずと雖も、未だ活ける信仰には非ざるな

り。

彼等は二の世界の間に立つ、一は死せる世界にして、他は生るべき力なき世界なり。

彼等は批評家歴史家以上なること數等なり。然れども、彼等は基督の所有、保羅の如き僕、約翰の如き靖献者に非ざるなり。彼等は冒て生存し且つ死せしことある基督を信ず。然れども、絶對の勝者、王者、救贖者たる基督、世々限なく生きて、陰府と死の鑰を持てる基督を信ぜず。活ける信仰は、單に歴史的基督に對する同情のみに非ず、此の大理想を讃歎し崇敬し愛慕することに非ず、彼の主義を受納し、彼の眞理を承諾することに非ず。否な、單に歴史的基督の

みを受くるは、此の基督に對してすら正當に非ざるなり。こは彼の要求に應ずる所以に非ず、彼の教訓が暗示し、彼の事業が醒起し、彼の品格が催促し、彼の心靈が要求する所に、全然反應することに非ざるなり。基督教主義を信ずるは、基督を信ずる活ける信仰と異なり。吾人は耶蘇の中にある眞理を把持し得んも、耶蘇たる眞理、永遠に活ける眞理としての耶蘇を體得する能はざることあらん。

二　活ける基督

吾人が死せる信仰と活ける信仰とを區別するに方り、吾人が眞に意味する所は、信仰の性質の差にあらで、寧ろ信仰の對象の差にてあるなり。對象は性質を決定す。根本的大差別は、死せる基督と活け

る基督とにあるなり。活ける信仰とは、活ける基督を信ずる信仰なり。活ける信仰、不變有力なる信仰、殊に有力なる信仰を喚起するは、唯だ一の活ける基督あるのみ。

諸君の信仰如何を驗せんが爲に、その四肢を試み、その脈搏に觸れ、その顏色を見、その活力を量らんとて思煩ふ勿れ。寧ろおのが信仰を活ける基督の上に置かんことを力めよ。此の基督に注目せよ、されば彼れ諸君の信仰に注目し給はん。活ける基督を體得せよ、さらば彼れ諸君の中に活ける信仰を起し給はん。聖書中に彼の聖墓を訪ねよ、さらば諸君が彷徨しつゝある間に、彼れ不朽の生命を以て諸君の背後に顯れ給はん。活ける信仰、活ける基督教、活ける基督

教國は、畢竟活ける基督を意味す。基督教は基督教國よりも大なり、而かも基督は基督教よりも大なるなり。基督の眞理は、二千年來基督教會が認識せるそれよりも大なり、而かも基督御自身は、基督の眞理よりも更に大なるなり。彼は彼に關して教へらるゝ眞理、彼が體現せる主義、彼の名にて爲さるゝ事業よりも遙に大なり。基督を信ずる信仰は、基督教國——教會を信ずる信仰、基督教——信仰個條、倫理組織を信ずる信仰に非ずして、現に活きてその見えざる實位に坐し、直接に人類の歷史と個人の心靈とを神國に導き給ふ、基督の見えざる自我の實在を信ずる信仰なるなり。

彼は種々の方法を以て働き給ふ。或はおのが歷史的人格によりて働

き、或はその歴史的教會によりて働き給ふ。而かも彼は尚多く、その永遠なる自我と聖靈とによりて働き給ふ。此の活ける基督は、見るべからず、壓すべからず、死すべからざるものなり。彼は王者にして、無限の權力を有し給ふ。彼は無限の能力と恩寵とを有し給ふが故に、限り無く忍び給ふ。彼は人事の大局の上に働き給ふのみならず、又た直接に個人の心靈と意志の上に働きて、その卑賤なると頑冥なるとを問ひ給はざるなり。彼は父の愛を喜び、贖はれたる者の愛を喜び、又た兩者の交通を喜び給ふ。

以上の事を實驗するは、歴史的基督を信ずるよりも大なり。然れども、こは歴史的基督を信ずる信仰が成長し圓熟せし時に、そが永遠

の光に照されて、その實相と眞髄その意義と極致とを發見せし時に始めて到達せらるべきものなりとす。

何故に余は斯く言ひ得るか、こは悉く講壇的獨斷説の一片には非ざるか。

基督教の説教者は、斷乎として之を明言するの義務あり。何となれば、基督が之を信じ之を言ひ給ひしは、明白なる事實なればなり。基督はおのが、一時的使命の爲に起され、時去れば局面より退隱すべき、歴史上の神の僕よりも大なることを、信じ且つ言ひ給へり。彼はおのが世界の存在以前に存在せしこと（アブラハムあらざりし前に我れあり）、天地の廢する後までも活きて、おのが所有なる多衆

心靈の王となり、彼等の崇拜と讃美とを受くべきとを、知り且つ言ひ給へり。父は萬物を彼に委ね給へり。萬物とは罪、死、惡魔、人類を包含す。天にあり地にある凡ての權威は彼に與へらる。父が彼と偕なり給ふ如く、彼はおのが民と偕なり給ふ。彼は彼等の爲に處を備へに行き、又た來りて彼等を携へ給ふ。天にありても尙ほ地上の事を守り導き祝し給ふ。彼なくば彼等は何事をも爲す能はず。而して以上の如き教理は、獨り第四福音書にのみ依るものに非ざるなり。

斯かる教訓は、畢竟何事をか意味するぞ。彼は余が今述べし所のものにてありしなり。然らずば、彼は一種の主我的妄想の奴隷にて

ありしなり。然れども、彼にして若し此種の誇大狂患者なりしならんには、その他の問題に關する彼の教訓の價値果して幾何ぞ。彼にして若し自己に關して謬想を抱きたりしものならば、彼が父に關し人に關し世界に關して教へし所果して何等の價値かある。彼れ自身に關することの外は、悉く彼が語りしことを信ずべきか。否な、彼が斯くも自己を以ておのが教理の中心點となせしに、若し自己に關して誤る所ありとせんか、彼は一切の事に關して他の信任を受くるに足らず、唯だ多少眞理を暗示する所あらんのみ。

若し諸君にして眞面目ならんには、諸君は單に歷史的基督の信仰に止まり得ざるべし。諸君の心情も之を許さゞるべく、理性も亦た之

を許さゞるべし。諸君の信ずる歴史的基督は、自己を歴史的以上のものと見做せり。若し彼の言にして誤りならんか、彼は讃歎の對象たる能はずして、却て憐憫の對象とならん、吾人の信任を價せずして、寧ろその寛恕を價せん。◎單に歴史的基督を信ずる信仰は、自家をも滅却す。何となれば、こは基督を以て誤れる熱狂家となすものなればなり。誤れる熱狂家は、信仰の對象たる能はず。然れども、若し諸君にして、人性を極めて劣等なるものと見、そが二千年來も斯かる人物を神と崇め、彼の狂信を受けてその信條とし、漸く今日に至りて彼の眞相を看破せしことを信じ得んには、こは余が議論の限に非ざるなり。

基督を單に歴史的人物と見るは、基督教に非ざるなり。そは全教會の福音、新約書の福音、基督自身の福音と異なれる、別個の福音たる也。

人類は決して基督と絶縁することなかるべし。然れども、こは斯かる點に於て基督の言をその儘に信ずることに由る。若し此の點に於て基督を信ぜずは、人類は遂に彼を棄つるに至らん。一英雄として一聖徒としてすら、彼を保持する能はず、況んや救主としておや。若し彼にして今日も否な永遠に、王たり救主たることなくば、昨日の理想人たることすらなきに至らん。

若し諸君にして、宇宙の法則と衝突するの故をもて、基督を棄つる

ことあらんか。是等の法則は固より否定すべきに非ざる也。然れども、敢て問ふ、是等の法則は同時に又た靈界の法則なるか。基督も亦た一個の宇宙にして、單に吾人の宇宙に於ける一事實若くは一分子のみに非ざるなり。基督人生に入り得る如く、人生も基督に入り得るなり。彼は世界の中にある世界、世界の將來を定むる運命、世界が發展しつゝある眞理なり。彼は萬物の秩序の中にある秩序にして、萬物の秩序を按排整齊するものなり。

譯者註、是れ基督を以て、世界の原型標準とし、萬物の終局原因とし、歴史發展の豫程とし、人類進歩の歸趣となすものなり。故に宇宙の法則に支配せられず、萬物の秩序に束縛せらるゝことなし。却て此の法則の立法者、此の秩序の整理者にてあるなり。

是れ活ける基督を信ずる活ける信仰なり。若し斯かる心靈の存在するあらんには、こは靈界に於ける永遠の王ならざるべからず。贖はれたる人類は、永久彼を王として撰ぶならん（たとひ彼等は彼が自己を撰び給ひしを忘るゝことあらんも）。彼は靈界の王なり法則なり原理なり。若し然らずんば、彼は全く無に歸せん。彼の支配は、絶對的なるか、破滅的なるか、二者その一に出でざるを得ず。

若し基督にして活くることなくば、信仰は漸に疲弊し終に死滅に至らざるべからず。諸君は死せる基督を以て、活ける信仰を養ひ得るものと思ふか。諸君或は云はん、多少基督を信ずる信仰を失ふことありとも、神を信ずる活ける信仰は尚ほ持續し得らるべしと。何と

な。基督の如き人格を死なしめ得たる神、神は自己に榮光を授け給はんとの基督の確信を挫折し得たる神、此の神を信ずる活ける信仰が果して持續し得らるゝにや。諸君は如何にして、斯かる神に對して信仰を置き得るにや。若し彼の最も光榮ある獨生子さへ死したらんには、彼れ果して尙ほ父たり得べきか。何たる憐れなる神らしからぬ父格なるぞ。その最愛兒の死するを見て、之を救ふ能はずとせば、吾人の父格よりも多く有力なる父格にはあらじ。若し神にして基督を甦らさず、その深き信仰をも全く水泡に歸せしめたりとせば如何にしてか能く薄弱なる吾人の信仰を支持し得ん。然り、神を信ずる活ける信仰も、畢竟活ける基督を信ずる信仰に外ならず。斯か

る信仰こそ、有名無實を免るゝ唯一の信仰なれ。基督若し活ける基督ならんには、單に不滅なる心靈のみには非ず。彼は不滅なる幾萬心靈中の一たるのみに非ず、又たおのが同類の首斑たるのみに非ざるなり。彼は最もおのれに近きものに對してすら、特別無比の位地を保有し給ふ。彼は全靈界の王なり、吾人の信仰を活かすものは彼なり。

若し然らずして、彼れ吾人の信仰に由て活かさるゝものならば、此の信仰は彼を不朽ならしむるに努力せざるべからず。彼にして若し活ける基督、王たる基督ならずば、時代の進むに從ひ、過去に遠ざかるに從ひて、薄らぎ行く基督たるなり。彼が信仰を喚起する力は

益〻微弱となり、吾人の彼に對する信仰は益〻茫漠となる。若し彼にして活ける基督ならずば、世々代々彼の感化は益間接となり、人類の數の增加するに伴ひて、彼の及ぼす勢力は愈〻減少す。多數の心靈は彼と吾人との間に介在して、限りある彼の光輝を吸收す。彼も佛陀と等しく、おのが敎會とその腐敗の中に沒却せらる。世界は進み、みて彼を忘れ、尙ほ進みて彼をその背後に遺す。彼は重に學者の基督とならん。吾人若し基督以上に進歩し得べしとせば、そは却て吾人に取りて一種の希望となり奬勵となるやも知れず。基督もその時代に於てこそ偉大なりしとはいへ、若し活ける基督王たる基督ならずとせば、吾人は靈的完成に於て彼以上の點に達し、神意を知ると多さが爲に、父との合致に於て彼以上の度に至るを望み得べきなり。吾人は又た他日、彼の機會が彼に許せるよりも、尙大なる事を彼の主義の爲になさんことを期し得べし。斯くて各時代は誇りて言はん、我は彼以上の事をなせり、我は彼をわが背後に遺せり、我は彼よりも深く人心の機微に觸れたりと。げにや今日、シエークスピヤ若くはイブセンを以て、基督よりも多く人間學に通ずとなすもの、蓋し少小に非ざるなり。

斯かる心的傾向は、少くとも基督の救主たる地位に對して危險なり。こは恩人として彼を崇めんも、救主として彼を否定す。こは別個の新宗敎の爲に地を拓かんも、而かも之れが爲に心靈に空虛と失望を

與ふ。若し基督にして救贖者たらずば、心靈は基督以上のものを要求せん。而かも二千年來の妄想始めて醒め、精神上の不愉快此上なく、永遠の希望全く絶へたる時、人の心靈より迸出すべき失望の長大息を發するの外なからん。如何なる心靈か、『我等は人類を贖ふものは彼なりと信ぜしものを』てふ、人類一般の悲歎を十分に發揮し得ん。何となれば、吾人が神に最も要求するものは、救贖者即ち活ける救贖者にして、教師、模範、恩人、理想に非ざればなり。

否な、余は更に百尺竿頭一歩を進めん。吾人が要する所は、單に救贖のみには非ざるなり。基督若し救贖の事業を成就せんが爲に來り、而して今や亡しとせば、彼れ若し聖き犧牲を以て神の正義を滿足さ

せんが爲に來り、必要條件既に滿たされ、神の愛の自由に流れ出づる道既に開けたる後ち、無何有の鄉に入りたりとせば、彼れ若し吾人の救はるべき豫備條件を果さんが爲に來り、而かも永久吾人の救贖たることなしとせば、吾人は彼に於てその要する救贖を見出す能はざる也。吾人が要するものは、各個人を神に導く活ける救贖者なり、曩日地上にありし時の如く今日もあり、今日ある如く永遠にもある、活ける救贖者なり、神に對してにあらで、自己を呵責する吾人の良心に對して、神にありて吾人の爲に辯解し、吾人の自家彈劾に對して、父の前に吾人の辯護者たる、活ける救贖者なり、吾人の良心の呵責より吾人を救はんが爲に、人の形を取りて來れる神の良

心たる、活ける救贖者なり――吾人の良心が鋭くせられ廣くせられ高くせられ、世界の刑罰全部に對する連帶責任によりて一層傷けられたる時に、殊に然りとす。吾人をして人たらしめ、英雄たらしむるものは、良心なり。然り、然れども、自己の罪、隣人の罪、人類全體の罪を思念せしめて、吾人の人格を愚弄するものも、又た良心なり。吾人若しおのが良心とのみ共に遺されなば、こは吾人を贖ひ又は助くるよりも、寧ろ大に吾人を壓倒せん。吾人はおのが良心よりも、一層確實なる一層仁慈なる一層普汎的なる保證を要す。吾人はおのが生來の道德的人格よりも、一層價値あるものを要す。吾人は『吾人が人たるよりも、寧ろ基督の所有なること』、おのが良心の

英雄たるよりも、基督の良心の僕たること、剛健者たるよりも、痛悔者たること、鐵騎たるよりも聖徒たることを要す。是れ、救贖者、人性を具ふる活ける救贖者、道德界の王にして所有者、活ける基督吾人よりも一層不朽なる主、吾人の不滅をして重荷たらしめざるものを要する、吾人の要求に非ずや。吾人は活ける救贖者を要す。活ける信仰の爲に之を要す、活ける神の爲に之を要す、活ける神の實在の爲に之を要す。

然り、活ける基督を失ふは、活ける神を失ふ所以にして、從て吾人の心靈と將來とを失ふ所以なり。基督に對する信仰を薄弱ならしむるものは、又た神に對する意識を茫漠たらしむ。基督を離るゝは、

雲霧の中に迷ひ入る所以にして、神の許に上り行く所以に非ず。世界に於て神を信ずる信仰を消滅せしめざるものは、基督を信ずる信仰にして、哲學者の論證や聖者の直觀に非ざるなり。若し基督にして薄らぎ行かんには、基督の神にして父たる、活ける人格的の神も亦消へ失せて、神の力は吾人の中より衰へ了らん。而してその結果は如何。吾人は人に對する信仰――相互に對する信仰、自己に對する信仰を失ふべし。神に對する意識を失はんか、歳月の進み行くにつれて、吾人自身に對する信仰、確信あり勇氣ある自我を失ふに至る。おのが力を頼みて神を棄つる者は、自己を信ずる信仰を失ふの途に、最大速力を以て進みたるなり。如何にして然るか。他なし。

諸君にして若し活ける神を失はんか、基督を失ひたるが爲に神を失ひたる如く、諸君は自我と自信とを失はん。諸君の神をして若し、一種の力、盲目無心なる力、反響なき一個の觀念たらしめんか、諸君は彼を以て諸君の心情と意志が交通し能はざるものとなし了らん。意志は意志とのみ交通し得べく、心情は心情とのみ反響し得べし。諸君の理想的人格をして、基督の如き活ける心靈ならて、一個の抽象的觀念に過ぎざらしめよ。諸君は神に對すると同じく、人格をも單なる力、單なる理想に化し去るべし。諸君は神をも人をも、心情が交通し、能はざるものとなす。諸君は彼等よりその心格を奪ひ去る。而かも彼等は、單なる心靈よりも大なる力たるを失はず。斯

くて、心靈界の大事實大經驗も、物質界とその諸勢力とに比して、更に劣等なる價値を有するに至り、活ける心靈は偉大なる宇宙力に屈服することゝなる。然れども、心靈をして一たび之を確信するに至らしめよ。是れ心靈の破滅なり最後なり。そは宇宙に對し、萬有の光景に對し、人生の打擊に對して、再び立ち上る力なく、宇宙はその上を蹂躙し了らん。心靈は自我を信ずる信仰を失へり、そは活ける神を信ずる信仰を失ひたればなり。心靈は活ける神を失へり、そは彼の顯現せる人格——活ける基督、永遠の仲保者救贖者を失ひたればなり。

仲保者、救贖者、吾人は活ける基督に對して、之より以上に進む能

はざるか。何ぞ然らん。尙ほ一歩を轉ぜよ。彼は懇求者なり、靈界の執事なり把鑰者なり。彼は我等の爲に懇求せんが爲に活き給ふ。是れ永遠の救贖なり。故に又た永遠の懇求なり。

基督の懇求

基督の懇求は、彼の救贖事業の繼續たるに過ぎず。贖罪の眞髓は祈禱なり。神に對する彼の永久的態度は祈禱なり。彼の靈の不斷なる勢力は祈禱なり。靈界の機會と能力を吾人に與ふるものは彼の祈禱なり。人間歷史の靈的發展を來す動力は彼の祈禱なり 見へざる世界の鑰、此の世界を歷史に入れ、此の世界に人類を入るゝ鑰を有するものは、避れる基督なり。陰府の鑰は祈禱なり。こは天國を開き

て心靈を入らしめ、心靈を開きて天國を入らしむる意志の力なり。然れども、こは決して吾人の祈禱に非ず、吾人の爲の祈禱にして、吾人が爲す祈禱に非ざるなり。

陰府の鑰、死より救ひて生命に入らしむる鑰を有するものは、懇求者たる基督なり。彼若し懇求者たらざらんには、又た永遠の救贖者たらざるべし。活ける基督は、救贖することなく懇求することなくしては、活き能はざるなり。若し救贖者の心靈より出づる固有自然の力が、永遠の懇求として持續せらるゝにあらずば、救贖は單に一時的事業たるに止まりしならん。懇求者たる基督を描くに、神の前に跪づきつゝ吾人の爲に哀求する姿を以てする勿れ。そは神の中に

ある神なり、自ら交通する神なり、吾人の爲に發する神の獨語なり神自身に對する神の言葉にして、吾人の爲には彼の事業なり。救贖者たる神靈の不變無盡なる力、その本來自然なる神性、永遠に靈界の萬象を通じて働くその活動として、彼の懇求を考へよ。基督の祭司的贖罪は完成せり。而かもそは、吾人に對するその餘響遺澤としてにあらで、彼自身の大能不朽なる靈の現在力として、斷へず活潑に働きつゝありとの意義に於て、完成せるなり。此の祭司は祭司の終極にして、此の終極は祭司的觀念の成就なり。吾人が教會の祭司制度を嫌ふ最大理由は、そが吾人の獨立を損害するが爲に非ず、却て救贖者の完全圓滿なる祭司的懇求を無視するが故なり。此の制度

や、活ける基督の與ふる活力を殺し、彼の完き懇求の光を薄くし、靈界の空氣を陰欝ならしめ、死と陰府の力を封じ、且つ救主の手より靈界の鑰を奪ふが爲に、吾人の心靈を封鎖し了る。聖徒の懇求、聖會の犧牲の如きは、救贖者の懇求にのみ開くる關門を、無理にこぢ破らんとする努力に過ぎざるなり。

三　各人に個人的關係を有する基督

余は最後に言はん、基督を信ずる信仰は、吾人に個人的關係を有する基督を信ずるにあり。

吾人は歴史上の基督を有せざるべからず、又た活ける基督を有せざるべからず。然れども、普汎なる法則により、天上の高きに座して

彼の王國を統治するのみの活ける基督は、十分不足なき救主には非ざるなり。彼は吾人に對して個人的關係を有せざるべからず。彼は我が立場に應じ、我が必要に適し、我が耻辱を拭ひ、我が罪惡を贖ひ、我が愛情を攪起する、我が救主ならざるべからず。彼は單に生存するのみならず、我が生活と相互に交渉せざるべからず。彼は我が心靈をおのが身に負はざるべからず。吾人は聖靈を信ず。吾人は靈なる基督に於て、吾人個々の生命を潔むる者、吾人の心底を讀む者、吾人の最も秘密なる困厄を救ふ者、吾人の最も深く且つ潔き決心を皷吹する者を發見す。吾人は吾人をして『我が主よ、我が神よ』と叫ばしむる者を有せざるべからず。吾人は甦れる基督を要するの

みならず、吾人の許に歸り來れる基督を要す、歴史的基督又は天上の基督を要するのみならず、靈なる基督、友なる基督、夫なる基督を要す。此の基督は、吾人日々の喜悦、悲哀、恐怖、煩悶、快活、信、望、愛に於て、吾人と偕なるなり。君にして主、吾人個々の深奥なる心靈の王にして愛者、吾人の個人的救贖の附與者にして目標吾人の良心の中なる良心、吾人の心情とその墮落及び復活の中にある心情、嗚呼吾人は如何許り之を要するものぞ。

是れ吾人の要する基督なり、吾人の有する基督なり。吾人は此の無上無比なる賜に對して、深く神に感謝せざるべからず。

近世講壇叢書

▲近世講壇叢書は歐米近世の説教家の説教の精粹を譯したるものなり。

▲近世講壇叢書は毎卷菊版半截百頁内外の清雅なる製本にして毎卷四五篇を載すべし。

▲此の叢書發行の目的は一は講壇の最良産物を紹介して信者求道者の良き讀物たらしめ、一は我國講壇の水平を高めんとするにあり。

(第一) 犧牲の燈　ロボルトン、ニコル著　富永德磨君譯　定價拾貳錢　郵税貳錢

(第二) 神に到る道　ボスホウルス教授著　開拓者編輯局譯　定價六錢　郵税貳錢

223
862

フオルサイス博士著　今泉眞幸君譯

（第三）聖なる父　定價拾五錢　郵稅貳錢

デビドソン教授著　大谷虞君譯

（第四）招かれし人　（印刷中）

吉田修夫君譯

（第五）ヂヨオヂ、アダム、スミス博士の說教（近刊）

（第六）ブシ子ルの說教　（近刊）

ドラモンド著

（第七）理想的生活　（近刊）

以下續出

フオルサイス博士著 今泉眞幸君譯
(第三) 聖なる父 定價拾五錢 郵稅貳錢
デビドソン教授著 大谷虎君譯
(第四) 招かれし人 (印刷中)
吉田修夫君譯
(第五) ヂヨオヂ、アダム、スミス博士の說教 (近刊)
(第六) ブシ子ルの說教 (近刊)
ドラモンド著
(第七) 理想的生活 (近刊)
以下續出

明治四十一年二月二十二日印刷
明治四十一年三月一日發行
(定價十五錢 郵稅二錢)

譯者 京都市上堺之段神興町 今泉眞幸
印刷人 東京市神田區美土代町二丁目一番地 島連太郎
印刷所 東京市麹町區美土代町二丁目一番地 三秀舍

發行所 東京市神田區美土代町三丁目三番地
日本基督教青年會同盟
【電話本局百五十六番】

THE HOLY FATHER

Principal Forsytha, D.D.

[redacted]

特61
161

聖なる父

国立国会図書館

020935-000-8

特61-161

聖なる父

フォルサイス/著

M41

ABI-0785